C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2012

Vol.2

中学版

特集

3 **主体的な進路選択**
——自らの意思と責任で決める力を育てる

4 課題整理
進路選択に関する課題整理と解決の方向性

8 インタビュー
真剣に向き合い「選ぶ」経験が進路選択力を高める
京都大総合博物館准教授◎**塩瀬隆之**

12 学校事例1
探究活動と職場体験を融合し自らの将来を描く力を育む
京都府京都市立大宅（おおやけ）中学校

17 学校事例2
データによる客観的な自己分析と計画的な学習で自己統制力を育む
佐賀県鳥栖市立田代中学校

22 学校事例3
「大変でも頑張る」経験を通して自らの選択に責任を持たせる
東京都福生市立福生第一中学校

26 まとめ
「主体的な進路選択」を育む指導に向けて

28 資料
悩みと不安の高校受験
——振り返れば自分が成長するきっかけに——

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い
生徒を温かく育むために教師に求められる厳しさを知った
愛知県小牧市立小牧中学校校長◎**玉置 崇**

30 ミドルリーダーの挑戦 ——前へ！前へ!!
円滑に学校運営を進めることを通じてより良い学校づくりを支えたい
栃木県佐野市立赤見中学校◎**片岡博志**

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第10回

生徒を温かく育むために教師に求められる厳しさを知った

愛知県 小牧市立小牧中学校校長 玉置 崇 TAMAOKI TAKASHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、玉置校長が語る。

たまおき・たかし　専門教科は数学科。小学校の教壇に3年間立った後、小牧市立味岡中学校に赴任。以来、愛知教育大附属名古屋中学校教官、光ヶ丘中学校校長、愛知県教育委員会義務教育課主査などを経て、2012年度から現職。

- 1979（昭和54）小牧市立米野小学校に赴任
- 1982（昭和57）小牧市立味岡中学校に赴任。この頃、一宮市の中学校に勤める馬場康雄先生に出会う
- 1990（平成2）愛知教育大附属名古屋中学校教官に着任。研究部長、教務主任を務める
- 1998（平成10）小牧市立小牧中学校に教頭として赴任
- 2004（平成16）小牧市立光ヶ丘中学校に校長として赴任
- 2008（平成20）愛知県教育委員会義務教育課主査に着任
- 2010（平成22）愛知県教育委員会海部教育事務所所長に着任
- 2012（平成24）小牧市立小牧中学校に赴任

「辞めてしまえ！」数学の神様の一喝

「一宮市に数学の神様がいる」。友人からそう聞いたのは20代後半の時でした。当時の私は、問題プリントを毎日作成し、生徒に解かせるなどして、生徒の学力向上にそれなりに自信を持っていました。ですから、馬場康雄先生を囲む勉強会に参加することになった時も、「神様の実力はどれほどのものだろう」と品定めに行く気分でした。

勉強会の内容は衝撃的でした。参加者がプリント教材やテスト問題を持ち寄り、馬場先生に講評していただくのですが、「この構成では生徒は混乱する」「時間の無駄」とバッサリです。私などは「関数指導の本質を分かっているのか」と言われる始末。しかし、言葉は厳しくとも、それらの指摘が的を射たものであることはすぐに理解できました。

先生の指導は、作問技術にとどまりません。「教師が教科書を確認しながら、『今日は○○を勉強するよ』と説明する授業では駄目だ。それまでの学習を踏まえ、次は何を学ぶべきか、生徒の口から出てこなければいけない」「教師が先を見通してお

かないと、生徒に不要な努力をさせてしまう」など、授業の根本を馬場先生は教えてくださいました。それまでどちらかと言えば「解かせる量」で生徒の学力を伸ばす指導をしていた私にとって、馬場先生との出会いは「数学の本当の力とは何か」を考えるきっかけとなりました。

また、馬場先生には指導技術を超えた、教師にとって最も大切なものも教えていただきました。

ある研究授業でのこと、髪を金色に染め、伏し目がちに席に着いている生徒が、私たち見学者の目を引きました。その生徒がおとなしく席に着いたまま授業が終わった時には、皆がホッとしたはずです。その後、研究協議会で見学者が一人ずつ感想を述べていき、馬場先生の番になりました。

「あれが良い授業だと思っているのなら、教師を辞めろ！」。馬場先生の一喝にその場が静まり返りました。

「あの生徒が、今日の指導目標に達することが出来ていないことは分かっている。だが、あの子は授業の邪魔もせずちゃんと座っていた。それなのに、あなたはなぜ一言も声を掛けなかったのか？　高熱でうなっている生徒がいたら、きっと声を掛けるはずだ。今日あなたは授業で『あなったら見捨てられる』とクラス全員に教えたのだ！」

生徒の頑張りに向き合わなかった授業者と協議会にいた全員への言葉に、誰も言葉を返せませんでした。あの場面は、きっとこれからも忘れられないでしょう。

ただ、厳しい叱責の後でも「よし、飲みに行くぞ！」と全員に声をかける温かさが馬場先生にはありました。宴席で先生が熱く語る教育論を一生懸命記憶して、帰宅後すぐにノートに書きとめたものです。

「春風のような言葉で生徒を育てたい」

生徒への温かな言葉は教師のチームワークが生む

私は、馬場先生と同じようには若手の先生に接することは出来ないでしょう。でも、「玉置先生の授業論は目からウロコだ」と言われたいですし、そのための努力を今後も続けたいと思っています。

馬場先生に出会った当時のノートには、授業計画と共に、馬場先生が語った熱い言葉が書き付けられている

本校赴任以来、私は毎日1時間、3教室くらい授業を見るようにしています。放課後には、先生方と授業や教材について話し合い、また教師役と生徒役を交替で演じながら模擬授業を行っています。それは、自分が馬場先生に教えられたことを引き渡す大切な時間でもあるのです。

私は荒瀬克己・前京都市立堀川高校校長の「木は光をあびて育つ　人は言葉をあびて育つ」という言葉が大好きです。子どもは生まれてから「笑った」「歩いた」と温かな言葉を浴びて育ちます。学校でも、春風のような言葉で生徒を育てたいのです。もちろん、厳しい言葉も時には必要ですが、そうした時は別の先生が「先生たちは君のことを思っているよ」と伝えてほしい。それが出来るチームワークを校内に育むために、教師同士も声を掛け合って、互いを高めていきたいと思います。

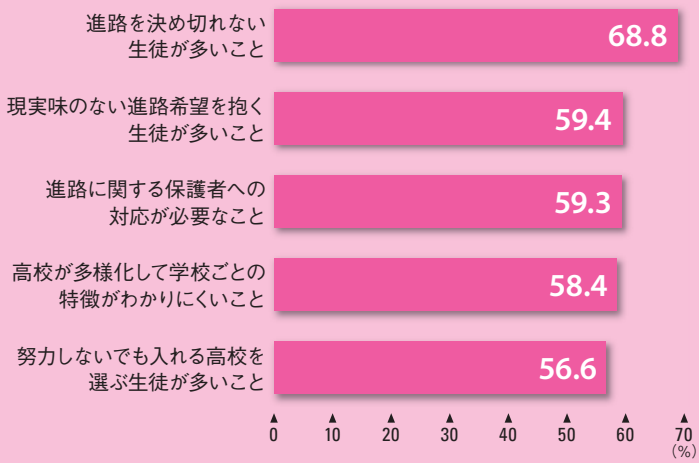
特集

主体的な進路選択

――自らの意思と責任で決める力を育てる

中学校では、社会における自己の役割や将来の生き方について、生徒自らが主体的に選択・決定していく力の育成が求められている。しかし、実際は「誰かが選択してくれる」のを待つ受け身な生徒が多いことに課題を感じている教師も多い。今号ではインタビューと学校の事例を参考に生徒の主体的な進路選択の力を育む指導について考える。

進路指導を行う上で、次のようなことに対してどれくらい困難を感じますか



注1）「とても困難を感じる」+「やや困難を感じる」の%
注2）全8項目のうち回答率の高かった上位5項目を掲載
注3）サンプル数は中学校教員2,827人
出典／Benesse教育研究開発センター「学習指導基本調査報告書　小学校・中学校版」（2011）

進路選択に関する課題整理と解決の方向性

2012年度から全面実施となった新課程では、生徒自らに将来の生き方について考えさせると共に、体験などを通して働くことに対する理解を深め、その先の適切な進路選択・決定へと導いていく指導が求められている。ここでは、進路選択に関する生徒の現状や指導の課題を、データと『VIEW21』中学版モニターの先生方の声から整理し、課題解決の方向性を考える。

新課程におけるキャリア教育観

新学習指導要領に見られるキャリア教育推進の視点

第１章　総則
第１　教育課程編成の一般方針

２　職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。その際、特に生徒が自他の生命を尊重し、規律ある生活ができ、自分の将来を考え、法やきまりの意義の理解を深め、主体的に社会の形成に参画し、国際社会に生きる日本人としての自覚を身に付けるようにすることなどに配慮しなければならない。

第４章　総合的な学習の時間
第３　指導計画の作成と内容の取扱い

２－(7) 職業や自己の将来に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、自己を理解し、将来の生き方を考えるなどの学習活動が行われるようにすること。

出典／文部科学省「中学校学習指導要領」より抜粋

中央教育審議会が提唱した中学校でのキャリア教育の役割

◎2009年7月審議経過報告

（学校教育の）各段階の中でも、中学校段階が極めて重要であると指摘したい。すなわち、中学校段階では心身の発達上の変化が著しく…（中略）…このような発達段階を踏まえれば、中学生に対しては、自らの将来の生き方･働き方等についてしっかりと考えさせるとともに、働くことの意味等について体験を通じて理解を深めさせ、普通教育・職業教育の適切な選択・決定等へと導くことが重要である。

◎2011年1月答申

発達の段階に応じた体系的なキャリア教育
【各学校段階の推進の主なポイント】
中学校「社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等を考えさせ、目標を立てて計画的に取り組む態度を育成し、進路の選択・決定に導く」

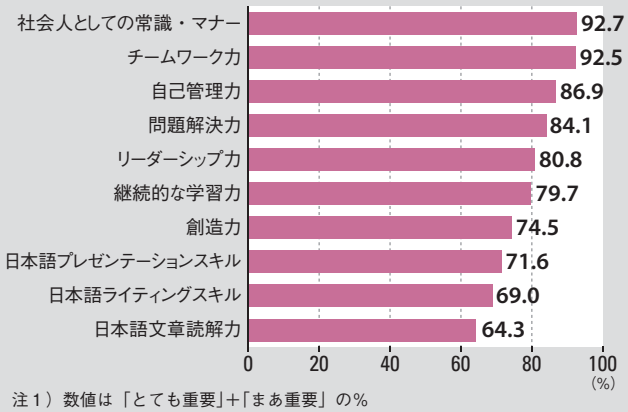
出典／中央教育審議会 キャリア教育・職業教育特別部会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（審議経過報告）（答申）より抜粋

主体的な進路選択――自らの意思と責任で決める力を育てる

社会が求める力と不足している力

企業が採用で重視するのは「社会人としての常識・マナー」「チームワーク力」「自己管理力」

企業の採用責任者に「採用時に重視する能力やスキル」を尋ねたところ、「社会人としての常識・マナー」、「チームワーク力」が９割を超え、続いて「自己管理力」「問題解決力」が挙がった。選択肢にはＩＣＴや英語に関する項目も含まれていたが、比率は相対的に低く、態度や志向性に関するものが上位にきている。また、基本的な読み書きを示す、「日本語ライティングスキル」「日本語文章読解力」が６～７割と上位に挙がっている。

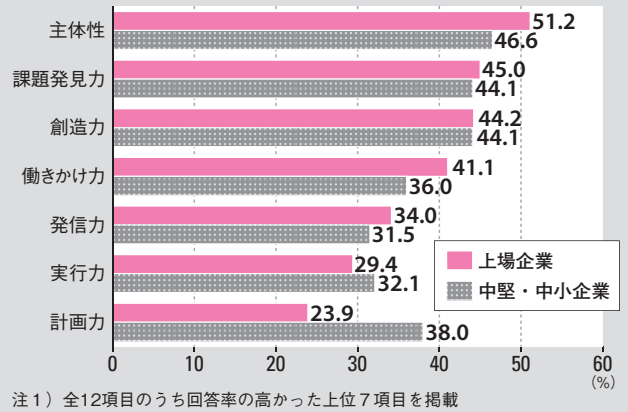


注１）数値は「とても重要」+「まあ重要」の％
注２）全22項目のうち回答率の高かった上位10項目を掲載
注３）対象は企業の採用責任者577人
出典／ Benesse教育研究開発センター「社員採用時の学力評価に関する調査」文部科学省受託研究（2008）

企業が若手社員に不足を感じるのは「主体性」「課題発見力」「創造力」

企業が若手社員に求めているにもかかわらず、不足していると感じている力を見ると、企業規模によらず不足感が高いのは、「主体性」「課題発見力」「創造力」「働きかけ力」「発信力」「実行力」であった。

一方、企業規模による差が大きかったのは「計画力」で、特に中小規模の企業において比率が高くなっている。



注１）全12項目のうち回答率の高かった上位７項目を掲載
出典／経済産業省「企業の求める『人材像』調査」（2007年）

現在の中学生の課題

『VIEW21』中学版読者モニターアンケートから

- 自分の進路や生き方について関心が低く、「誰かが決めてくれる」のを待つ生徒が目立つ
- 進路や職業に対するイメージが偏りがちである
- ３年生で現実的な進路選択を迫られると、「入りたい高校」から「入れる高校」に安易に変更する姿が見られる
- 進路希望はあるが、その目標と自分の置かれている位置との距離を正しく捉えていない生徒がいる

進路指導での課題

大都市圏では高校入試の選択肢が多様化

進路指導の課題を地域別に見たところ、「進路を決め切れない生徒が多いこと」や「現実味のない進路希望を抱く生徒が多いこと」「学校内に進路指導のノウハウが不足していること」については地域差が小さく、全国的な課題として捉えることが出来る。

一方、「高校の入試制度が複雑なこと」「高校が多様化して学校ごとの特徴がわかりにくいこと」については地域差が大きく、南関東や近畿といった大都市圏を含む地域において比率が高くなっている。

近年、高校では、生徒の多様な興味・関心や進路に応じることが出来るよう多彩な学科が設けられると共に、入試機会も複数回にするところが増えた。このような変化が、進路指導の難しさにつながっていることが推測される。

■地域による差が小さい進路指導の課題

(%)

	北海道	東　北	北関東	南関東	中　部	近　畿	中　国	四　国	九州・沖縄
進路を決め切れない生徒が多いこと	67.1	72.6	60.8	70.2	71.4	65.6	68.9	69.2	67.9
現実味のない進路希望を抱く生徒が多いこと	54.0	58.8	58.1	63.8	59.8	53.6	62.2	63.6	58.2
学校内に進路指導のノウハウが不足していること	26.3	34.3	27.5	34.2	24.6	24.8	27.2	32.7	34.4

■地域による差が大きい進路指導の課題

(%)

	北海道	東　北	北関東	南関東	中　部	近　畿	中　国	四　国	九州・沖縄
高校の入試制度が複雑なこと	35.8	48.2	53.1	67.5	40.7	61.9	51.1	47.6	44.4
高校が多様化して学校ごとの特徴がわかりにくいこと	43.8	55.1	57.2	70.0	51.7	67.7	56.1	49.5	52.4

注１）「とても困難を感じる」+「やや困難を感じる」の%
注２）地方の区分は、「北関東」は茨城県・栃木県・群馬県。「南関東」は埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県。「中部」は新潟県・富山県・石川県・福井県・山梨県・長野県・岐阜県・静岡県・愛知県。「近畿」は三重県・滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
注３）対象教員は北海道137人、東北303人、北関東222人、南関東594人、中部569人、近畿375人、中国180人、四国107人、九州・沖縄340人
出典／Benesse教育研究開発センター「学習指導基本調査報告書　小学校・中学校版」（2011）

教師が感じる進路指導の課題

『VIEW21』中学版読者モニターアンケートから

- １年生から、段階に応じたキャリア教育と進路指導を行うべきだが、具体的な手立てが分からない
- 指導する教師側もどうしても学力に目が行きがちで、キャリア教育の大きな流れの中で進路指導をする意識に欠けている面がある
- 職場体験をしても表面的な感想にとどまり、生徒の勤労観をいまひとつ育めていない
- 生徒が納得のいく選択や決定を行う上で必要な、客観的なデータが不足している

主体的な進路選択――自らの意思と責任で決める力を育てる

課題解決に向けた方向性

◎社会の変化を見据え、今、生徒に必要な進路指導とは?

- **複数の選択肢の中から自分で適切なものを選ぶ**訓練を、教科指導や進路指導に意図的に組み込む
- どのような選択にも不安はつきものであり、**モヤモヤを抱えながらも前に進んでいける力**を鍛える

インタビュー
京都大総合博物館准教授
塩瀬隆之
▶P.8

◎自ら進路を選択し、決める力を育むための指導の工夫とは?

- ポスターセッションを通した探究活動で、**自分の頭で物事を考え、将来や夢への道筋を描く力**を育てる
- ３年間の「総合的な学習の時間」で積み上げてきた**生徒の夢や志の実績を、志望校選択の指導に生かす**

学校事例１
京都市立
大宅（おおやけ）中学校
▶P.12

- 客観的なデータを共有し、**生徒が自ら取り組みを見直し、改善する力**を育てる
- 自分の目標を達成するために「がまんすること」を決めさせ、**自己統制力**や**計画遂行力**を育む

学校事例２
鳥栖市立
田代中学校
▶P.17

- 保育園や福祉施設に限定した職場体験を通して、生徒の**自尊感情や自己肯定感を高める**
- 中学校としての「型」を教え込み、班活動を通して生徒自治をさせ、**責任感や自主性を芽生えさせる**

学校事例３
福生市立
福生第一中学校
▶P.22

◎インタビュー・学校事例に見る自校化のポイントは?

- 主体的な進路選択の力を育てるためには、**進路やキャリアを考える必要感を高める**働きかけと、**生徒自身に物事を選択・決定させる**機会を意図的に仕組むことが必要

まとめ
「主体的な進路選択」を育む指導に向けて
▶P.26

インタビュー

真剣に向き合い「選ぶ」経験が進路選択力を高める

京都大総合博物館准教授　塩瀬隆之

生徒が主体的に進路を選択していく力を育むために必要な指導とは何か。コミュニケーションデザインの専門家である塩瀬隆之准教授は、日々の教育活動を通した選択の訓練と、進路選択後の進路指導の重要性を指摘する。生徒の進路選択力を高める指導の工夫を聞いた。

選択する訓練の不足が迷いや後悔を生む

中学校卒業時の進路選択を、大学受験や就職活動と同じくらい大切だと考えている方は、それほど多くないのではないでしょうか。私は中学校で講演をする時、「高校受験は大学受験や就職活動と同じくらい人生の重要な選択です」とお話しさせていただいています。もし、生徒が高校選択を真剣に考えていないとしたら、保護者や教師がその重要性を正しく伝えきれていないからかもしれません。

もちろん、中学校卒業時の進路選択で人生の全てが決まるわけではありません。ここで重要なのは、選択の結果ではなく、選択する行為そのものです。

中学校から高校へ進学する時の選択肢は、それほど多くありません。ところが、高校に入り、大学進学や就職となると選択肢は急に広がります。社会に出る時には、「世界は広い」ことを感じつつも、選択肢の全てを見ることも出来ずに、限られた世界の中で人生を左右する重要な選択を行うことになります。

「複数ある選択肢から適切なものを選ぶ」という行為は、ある程度の時間を掛けて訓練することが必要であるにもかかわらず、日本の教育ではその機会がほとんどありません。ただでさえ人生の選択には不安がつきまとうのに、選択する訓練をしていないために、不安は限りなく広がっていくのです。

大学受験や就職活動では、選択せずに残した選択肢の数も多くなるため、選択した現状に不満が多いと、「この選択で良かったのか」「もっと良い道があったのではないか」という後悔や疑問にとらわれてしまうのです。

大切なのは選択肢の数ではなく選択の過程

高校入試の限られた選択肢の中で、生徒はどこまで切実に進路と向き合えるのでしょうか。私は、少ない選択肢でも、進路について真剣に考えることは可能だと思います。

最終的に進学を決めた高校が自宅に近い学校だったとしても、「将来、進みたい道があり、そのために必要な勉強が出来るから」というように、その決定に至った明確で積極的な理由があれば、たとえ選択肢は少なくても、入学後、自分がそこにいる意味を肯定的に考えられるのです。逆に、消極的な理由だけで選んでしまうと、「保護者や教師に言われたから」などと選択の失敗を他人のせいにし、不満ばかりが大きくなっていくでしょう。高校生活を送る中で、本当にこの選択でよかったのかという疑問が湧いた時、困難に負けずに踏みとどまれるかどうかは、選んだ過程にかかってくるのです。

どのような選択をしても、理想と現実の差

主体的な進路選択――自らの意思と責任で決める力を育てる

は必ず出てきます。選択肢の数ではなく、自分の問題としてどれだけ真剣に向き合い、その中で悩みながら自分で選択したという過程や経験が大切なのです。

無限にある選択肢から自分なりの答えを見付ける

生徒の選択力を鍛えるために、日常の教育活動の中で出来ることはたくさんあります。

例えば、教科書などにある選択問題を見ると、選択肢の中に正解があることがほとんどです。一方、アメリカの小・中学校の教科書の問題には、「この情報だけでは1つに定まらない」という選択肢のある問題があります。これには他の選択肢にはない無限の解答が含まれており、選択肢の中に必ず正解があるとは限らないということを、教科の問題を通して知ることが出来るのです。

教材の工夫によって選択力を鍛えることも出来ます。私は、小学校・中学校・高校の先生方と共同で「宇宙箱舟」というゲーム形式の教材を作りました。もし宇宙に引っ越すとしたら、どの動物を宇宙船に乗せるのかを考えてもらうもので、途中で病気が発生して鳥が死んだり、虫だけになってしまったり、さまざまな困難が待ち構えています。生物多様性や食物連鎖、倫理、宗教、国際理解など、いろいろなテーマに絡めて活用できる教材です。

しおせ・たかゆき◎京都大大学院工学研究科博士前期課程修了。博士（工学）。京都大大学院情報学研究科助教などを経て、現職。

子どもたちは、始めは「パンダを連れて行きたい」など、自分の好きな動物を舟に乗せたがりますが、徐々に自分が生き延びることを考え、牛や豚、鶏といった動物を選ぶようになります。更に、「牛や豚を連れていくなら、餌も必要だね」「なぜゴキブリはいけないのだろう」といった議論を繰り返す中で、正解はないけれども悩みながら進んでいかなければいけないことを経験します。多くの選択肢からそれぞれのつながりを考え、自分なりの解答を見つける経験が、人生の重要な選択の際にも生かされることを期待しています。

大学と社会のつながりを伝え生徒の視野を広げる

毎日の授業や生徒との会話の中で、先生方が生徒の視野をどれだけ広げられるかということも、重要なポイントになります。そのためには、何よりも、先生自身が社会と学校、学問とのつながりに関心を持ち続けていただくことが大切です。

例えば、「将来、環境問題に取り組みたい」という生徒に対して、「大学に『環境○○学部』や『環境○○学科』というのがあるらしいよ」という情報提供をしてしまうと、むしろ選択肢は狭まってしまいます。環境問題であれば、エネルギーや材料などの理系分野から入ることも出来ますし、循環経済や哲学など文系分野からアプローチすることも可能です。文理

を問わずさまざまなルートがあり、自らの希望を実現させる手段はたくさんあると伝えることが、生徒の意欲を引き上げるポイントになると思います。

大学の出身学部が、社会に出てからのキャリアにそれほど関係のないことは、大抵の大人が知っています。しかし、多くの子どもが、「一度、理系を選んだら文系には行けない」「大学に入れば、自分が進んだ学部以外の分野には二度とかかわることが出来ない」という強迫観念のようなものを持っています。実際には、工学部から大学院で薬学研究科に進学する人や、法学部の学びで特許に注目し、工学関係に進む人もいます。こうした柔軟な路線変更が出来るという事実は、進路指導の場面で生徒にあまり伝えられていないそうで、大学生になってから「なんだ」と安心する学生も少なくありません。

人は、理系や文系の看板を一生背負って生きていくわけではありません。世の中の多くの問題は、理系の知識だけでも、文系の知識だけでも解決できません。中学校時代からそうした大学と社会のつながりを伝えて、生徒の視野を広げていくことも大切です。

「進路選択後の進路指導」で前に進む耐性を鍛える

子どもが自分の将来に主体的に向かっていくためには、自分の選択に真正面から向き合う勇気も必要です。そのために、私は「進路選択後の進路指導」をぜひ教育現場でも導入していただけないかと考えています。

生徒の進路選択には十分な時間を取りたいと考えても、どうしても限界があるでしょう。それはやむを得ないと思いますが、真剣に考えれば考えるほど、決定までに時間が掛かるものですし、いったん決まったとしても、本当にそれで良かったのかと、悩み続ける生徒も少なくないはずです。本来、進路選択とはそういうもので、モヤモヤしたものをなくすことは簡単ではありません。大切なのは、モヤモヤを解消することではなく、モヤモヤを抱えながら前に進んでいける耐性を鍛えることです。

モヤモヤと向き合う力を養うためには、なぜそれを選んだのかを考えたり、説明したりする訓練が有効です。生徒が自分の選択について語り、先生は聞き役に徹する。あるいは後輩に語る機会をつくってもいいかもしれません。生徒全員が大変であれば、代表の生徒が語るのも良いでしょう。モヤモヤと向き合う環境をいかにつくるかという点は、生徒の選択力を高めたり、生徒が自身の選択を受け入れていく上で欠かせない要素です。

生徒の「気付き」を待つことが主体性を引き出す鍵となる

多くの学校では、進路決定に期限を設けていると思います。たくさんの時間を取れることが理想的ではありますが、願書提出など何らかの締め切りが存在することも現実だからです。

しかし、期限が迫ってきて、周囲からの発言が増えれば増えるほど、生徒にとっては「進路を決めたのは私以外の誰かである」という思いを強くしてしまい、学習への意欲を失い、進路先でも積極的になれなくなってしまうかもしれません。もちろん、生徒の主体性に任せることは大切ですが、頑として手を差し伸べないことに徹してしまうと、生徒はかえって不安になるだけですから、生徒が進路を選択する上で判断材料となる客観性の高い情報を、教師が提供することは必要です。ただ、そうした情報を過度に信頼し、その評価通りに指導するだけでは、その決定を生徒自身のものに出来ません。

生徒は簡単に進路を決められないということを、まず先生方が自覚し、その上で、生徒が与えられた情報や提案を受け止め、自分なりに解釈し結論を出すまで、先生がじっくりと待つことが大切ではないでしょうか。生徒が自分の言葉で説明できるようになるまでじっくり考えさせ、生徒自身が気付くのを待つのが理想です。

もちろん、進路を決められない生徒には、どのような観点を大切にしたいのかを一緒に考える時間を持つなどの支援も必要でしょ

主体的な進路選択――自らの意思と責任で決める力を育てる

う。ただ、その際にも重要なのは、生徒自身の気付きを、大人があまりコントロールし過ぎないことです。自立性や自由なアイデアは、時間を掛けて待ってさえいれば、必ず生徒の中に現れます。待ちたいと思っても待ちきれない、しかし、それでも教師や保護者がほんの少しでも長く信じること――それが生徒の主体性を引き出す鍵ではないでしょうか。

大人も理想と現実のギャップの中で生きている

子どもが主体的に進路を選択するためには、職業観・勤労観を身に付けることが必要だといわれます。確かにその通りなのですが、職業体験や職業調べだけから職業観を教えきれるのかどうかは疑問です。

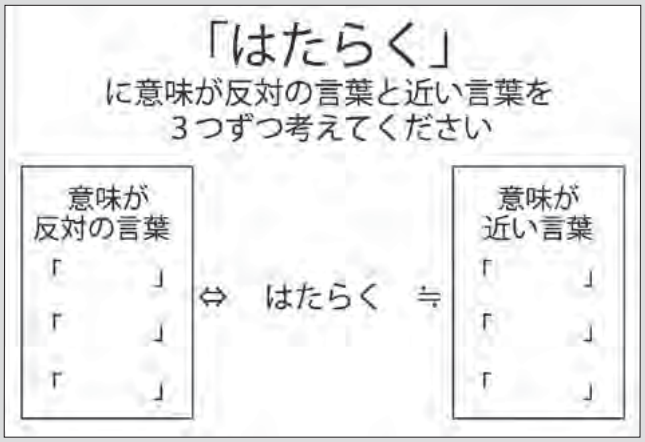
そもそも、大人はどのような職業観や勤労観を持っているのでしょうか。最近、私は講演やワークショップで出会った学校の先生方に「『はたらく』の反対語はなんですか」と尋ねるようにしています。ここでの「はたらく」には、対価をもらっているかどうか、どこかの企業に所属しているかどうかは問いません。「はたらく」について、意味が反対だと思う言葉と意味が近いと思う言葉を、3つずつ書いてもらっています（図）。この質問をすると、「はたらく」ことに対して、その人がどのようなイメージを持っているかがよくわかります。

反対語に「死ぬ」という言葉を挙げる人は、極端な表現ではありますが、「はたらく」ことを肯定的に捉えている人なのでしょう。反対語に「さぼる」、類似語に「社会貢献」を挙げる人は、仕事に対して時に生きがいを、時にしんどさを感じているのかもしれません。大人も、理想と現実のギャップに悩みつつ、モヤモヤしたものを抱えながら仕事と向き合っているわけです。

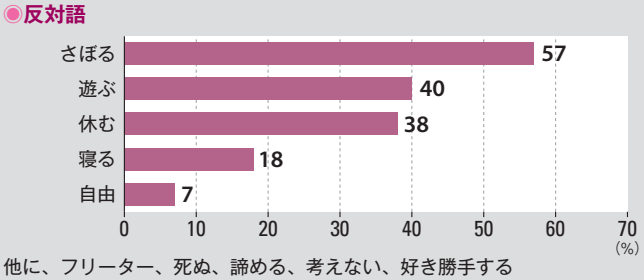
大人も悩みながら働いているとしたら、悩みそのものを子どもと共有するとよいと思います。知識として教えることが出来ない以上、大人もそこを正直に認めて、生徒と一緒に悩み、考える機会を設けられると良いのではないでしょうか。

あるいは、教師が自分の体験を生徒に向けて語るのも良いかもしれません。保護者や兄弟姉妹、学校の先輩の話を聞く機会を設けるのも良いでしょう。選択の時にどのように悩んだのか、満足していること、後悔していることはないか。失敗も成功も含めて、大人や先輩が経験を語ることで、進路選択の大切さを子どもは気付くのはないでしょうか。

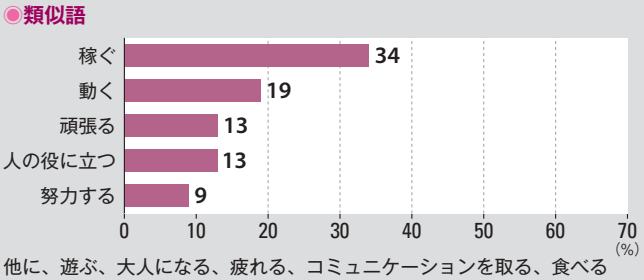
図　「はたらく」の反対語と類似語を尋ねた調査結果



「はたらく」の反対語と類似語をそれぞれ3つ挙げてもらう。
＊塩瀬先生提供の資料をそのまま掲載



他に、フリーター、死ぬ、諦める、考えない、好き勝手する



他に、遊ぶ、大人になる、疲れる、コミュニケーションを取る、食べる

＊塩瀬先生がワークショップで尋ねた20歳代～60歳代の1,232人に調査した結果

学校事例 1

探究活動と職場体験を融合し自らの将来を描く力を育む

京都府 京都市立大宅中学校

京都市立大宅中学校では、職場体験と探究活動を関連付けて行い、学問的な視点から「働くこと」にアプローチしている。進路意欲を高めるだけでなく、ポスターセッション形式の発表によって、表現力の向上、自尊感情の涵養などの成果も現れている。

家庭環境が厳しく将来像が描けない生徒たち

京都市山科区にある中規模校の京都市立大宅中学校は、4年前から「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）でキャリア教育に取り組み始めた。背景には、生徒の学力の低さ、進路意識や規範意識の希薄さがある。衛藤明夫校長は次のように述べる。

「この地域には家庭環境に課題を抱える生徒が多くいます。また、校区内の小学校は1校で、一度出来た人間関係を変えることは難しく、不登校となる生徒もいます。私立中学校に進学する学力上位者も多く、公立中学校は学力面でも厳しい状況が続いています」

このような状況にある生徒が、夢を抱き、学習に前向きに取り組めるようにと、衛藤校長が着目したのが総合学習だった。

「生徒が自分で進路を決めるには、この年齢なりの将来展望や夢を持つことが重要です。働くとは何かを考え、学ぶ意欲を喚起させる、3年間のプログラムをつくりました」

3年間の流れは次の通りだ。1年生では仕事や経済への関心を深めるための講座を開き、2年生での職場体験に向けての職業調べとポスターセッション（ポスターによる発表）を行う。2年生では、京都の産業を学ぶフィールドワークと5日間の職場体験をした上で、疑問に思ったことをテーマにして調べ学習をし、ポスターセッションを行う。3年生では、企業と大学を訪問し、関心を持ったことの調べ学習とポスターセッションをした後、3年間の集大成として卒業論文を作成する。

それでは具体的な活動内容を見ていこう。

◉1年生での取り組み

ファイナンス講座で生活設計力を養う

1年生の総合学習は、基礎講座、ファイナ

School Data

◎1987（昭和62）年に勧修中学校東分校より独立、大宅中学校として開校。2009年度、経済産業省の早期工学人材育成事業の指定校となり、「総合的な学習の時間」を中心に、職業体験と工学人材の育成を推進している。

校長◎衛藤明夫先生

生徒数◎382人　学級数◎16学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒607-8175　京都府京都市山科区大宅山田113

TEL◎075-573-3067

URL◎http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=203906

公開研究会◎未定

主体的な進路選択――自らの意思と責任で決める力を育てる

ンス講座、職業講座が柱となる。

基礎講座では、生活の基本となる「お金」について学ぶ。班ごとにテーマを設定し、分かったことを壁新聞にまとめる。図書館やインターネットなどを活用した情報の探し方も学び、調べ学習の基礎も身に付ける。

ファイナンス講座は、基礎講座を受けて、実践的・体験的に生活設計について学ぶ。京都市教育委員会が開設する「ファイナンスパーク」を訪れ、食費や光熱費など生活に必要な費用を計算したり、商品やサービスの購入、税金の支払いなどの体験をしたりすることを通して、身近なところから人生設計について考えさせる。生徒からは「思った以上に生活にお金がかかっている」「食費が高い」などの声が上がるという。

そして、職業講座では、社会人から仕事のやりがいや苦労などを聞く。職業は違っても、それぞれ誇りや充実感を持って働いていることを、生徒に感じてもらうのがねらいだ。2学年主任の森下治樹先生は次のように語る。

「生徒は保護者や先輩の姿だけを見て、社会を想像しがちです。保護者の苦労などに視点を置いてしまうと、生徒は将来に行き詰まりを感じ、人生を否定的に描いてしまいがちです。多くの大人の話を聞き、人生にはさまざまな喜びややりがいがあることを感じさせ、働くことに前向きなイメージを持たせることが重要だと考えます」

◉2年生での取り組み
生徒の「なぜ」を大切に職場体験のテーマを設定

2年生では「働くこと」について探究し、そのまとめとしてポスターセッションを開き、将来の目標を膨らませていく。

まず、夏休み前後に京都の伝統産業をテーマとしたフィールドワークを行う。西陣織や京くみひもなどの伝統技術が、現代の工業製品や海外の企業にも活用されていることを学んだ後、伝統産業の現場を訪れて、どのように商品が出来るのか、人々が働いているのかを学ぶ。そして、夏休みの課題として、自分が伝統技術を生かして起業するとしたら何をするかを考え、商品イメージやテーマなどを図や文章で書いてまとめる「商品企画書」を作成する（P.14図1）。

次に職場体験を行い、探究活動と関連付け、働くことの意義を追究する。①事前学習で自分の訪問先の仕事に関する疑問をいくつか挙げ、②その中から訪問先で調べたいテーマを決める。③テーマについての仮説を立て、④訪問時に知るための方法や手順を考え、職場体験に臨む。テーマは、訪問先が保育園なら「子どもと触れ合っていく上で大切なことは何か」「どうやって園児を増やしているか」、飲食店であれば「なぜお持ち帰りは値引きされるのか」「お客が一番多い時間は何時頃か」などさまざまだ（P.14図2）。研究主任の西本幸史先生は次のように語る。

「調べればすぐ分かるようなテーマもありますが、テーマは出来るだけ生徒の発想を大切にしています。教師が指導しようとすると、生徒は受け身になりかねません。生徒が知りたいと思うことを尊重し、主体性を引き出していきたいと思っています」

テーマをうまく設定出来ない生徒には、担任が「興味があるものは何か」「家にこういうものがあるよね」などと声を掛け、生徒からアイデアを引き出していく。教師は生徒が主体的に取り組めるような支援に徹するのである。

「以前は明確な目的がなかったため、多くの生徒は『楽しかった』『仕事は大変だと思っ

京都市立大宅中学校校長
衛藤明夫 えとう・あきお
『教師の存在そのものが教育である』という意識を持って指導に当たっている」

京都市立大宅中学校
西本幸史 にしもと・こうじ
研究主任、英語科担当、3学年担任。「苦境を乗り越えるために必要な考える力や発想力を生徒に育てたい」

京都市立大宅中学校
森下治樹 もりした・はるき
保健体育科担当、2学年主任。「いつも志を持ち、自分の夢に向かって進んでいける生徒を育てたい」

た』といった感想しか出てきませんでした。しかし、探究活動と結び付けることで、会社は単に働いて給料をもらうところではなく、職場では社員一人ひとりの創意工夫が必要で、アイデアがなければ充実した仕事は出来ないということを感じた生徒も多かったようです」（西本先生）

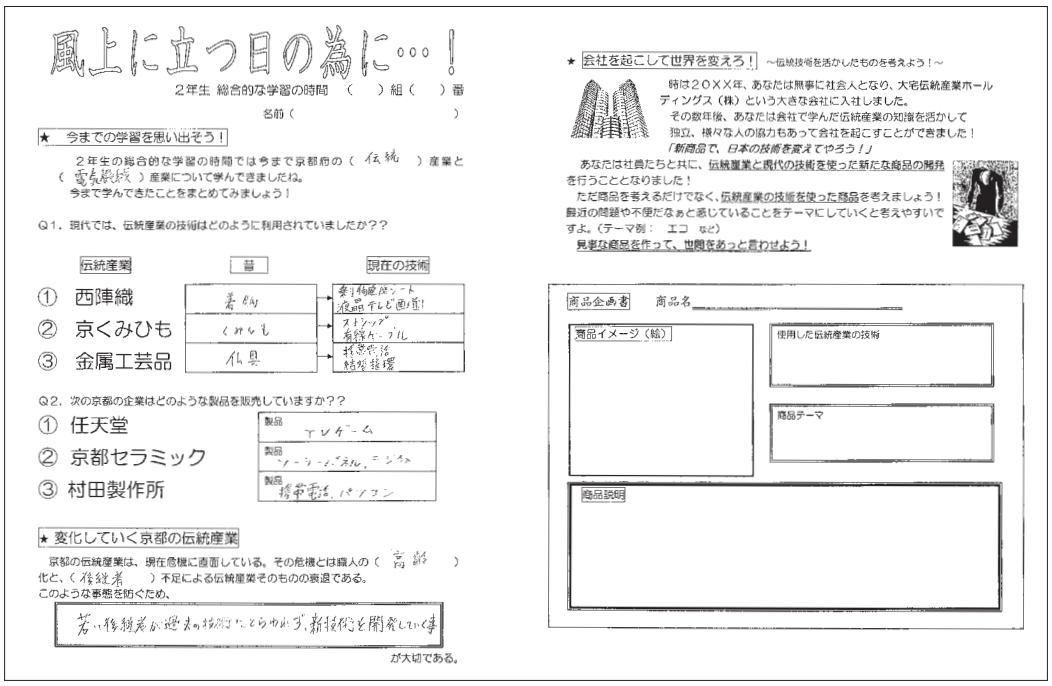
ポスターセッションで論理的思考力を育む

職場体験が終わると、ポスターセッションに向けた準備に入る。事前に考えていた調べたいテーマについて、職場体験を通して分かったこと、新たに感じた疑問などを、模造紙にまとめるのだが、生徒は担任の助言を何度も受け、論の展開や見せ方などを作り直して、完成させる。

ポスターセッションは体育館で行う（**写真**）。1クラス分全員のポスターを貼り、他クラスの生徒は関心のあるポスターを見に行く。生徒は自分の書いたポスターの前に立ち、考えを発表する。これをクラス順番に行う。

ポスターセッション

図1　「商品企画書」


風上に立つ日の為に…！

2年生 総合的な学習の時間　（　）組（　）番

名前（　　）

★ 今までの学習を思い出そう！

2年生の総合的な学習の時間では今まで京都府の（ 伝統 ）産業と（ 電気機械 ）産業について学んできましたね。
今まで学んできたことをまとめてみましょう！

Q1．現代では、伝統産業の技術はどのように利用されていましたか？

伝統産業	昔	現在の技術
① 西陣織	着物	要引極度シート 液晶テレビ画面!
② 京くみひも	くみひも	ストッキング 看護ケーブル
③ 金属工芸品	仏具	技術衛星 結婚指輪

Q2．次の京都の企業はどのような製品を販売していますか？

① 任天堂	製品 テレビゲーム
② 京都セラミック	製品 ソーラーパネル、ニンタ
③ 村田製作所	製品 携帯電話、パソコン

★ 変化していく京都の伝統産業

京都の伝統産業は、現在危機に直面している。その危機とは職人の（ 高齢 ）化と、（ 後継者 ）不足による伝統産業そのものの衰退である。
このような事態を防ぐため、

若い後継者が過去の技術にとらわれず、新技術を開発していく事

が大切である。

★ 会社を起こして世界を変えろ！ ～伝統技術を活かしたものを考えよう！～

時は２０ＸＸ年、あなたは無事に社会人となり、大宅伝統産業ホールディングス（株）という大きな会社に入社しました。
その数年後、あなたは会社で学んだ伝統産業の知識を活かして独立、様々な人の協力もあって会社を起こすことができました！
「新商品で、日本の技術を変えてやろう！」

あなたは社員たちと共に、伝統産業と現代の技術を使った新たな商品の開発を行うこととなりました！
ただ商品を考えるだけでなく、伝統産業の技術を使った商品を考えましょう！
身近の問題や不便だなぁと感じていることをテーマにしていくと考えやすいですよ。（テーマ例： エコ など）
見事な商品を作って、世間をあっと言わせよう！

商品企画者　商品名＿＿＿＿＿＿

商品イメージ（絵）

使用した伝統産業の技術

商品テーマ

商品説明

商品企画書は、京都の伝統産業について学んだ後、「自分がその知識を生かし、現代技術も使った新商品をつくる」という設定で書く

＊同校の資料をそのまま掲載

写真　ポスターセッションの様子。生徒は研究内容をまとめたポスターを作成し、それを見に集まった生徒に内容を説明する。聞く側は少人数で発表者との距離が近いため、不真面目な態度を取る生徒はいないという

図2　2年生のポスターセッションのテーマ例

□ 書店
- 本を探しているお客さまへの気遣いは何か
- 店の本の配置や種類とお客の引き付け方

□ スーパー
- 万引き対策は何か
- 処分された商品の行き先

□ 飲食店
- 新商品を出すタイミングについて
- 常連客を増やすための工夫とは

□ 消防署
- 待機の消防士は何をしているのか
- 消防士の義務感について

□ 高齢者施設
- お年寄りの方にイベントを楽しんでもらう工夫について
- 介護する時の正しい接し方について

＊同校の資料から編集部で抜粋して作成

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

で重要なのは、発表の巧拙以上に、聞き手とのコミュニケーションだ。聞き手は分からないことや詳しく知りたいこと、確認したいことがあれば、発表中でも随時質問することができる。

このような、自分で調べ、論を構築し、発表する体験を通して、論理的思考力、表現力、コミュニケーション能力、聞く力を高めることが、ポスターセッションのねらいだ。

「不満があると感情的な言動で物事を処理しようとする生徒がいますが、なぜ問題になったのか、相手が何をして、自分はどう思ったのか、きちんと話を整理しなければ、問題は容易に解決できません。論理的に物事を考える思考法とコミュニケーション能力の両方を鍛えたいと考えました」（衛藤校長）

ポスターセッションを始めてからは、生活態度も落ち着き、生徒同士の問題も減った。すぐに感情的になって食ってかかっていた生徒が、きちんと順序立てて考え、話を組み立てることが出来るようになってきたという。また、普段の生活においても他人の話に耳を傾けられる姿勢が身に付いてきたと、衛藤校長は感じている。

「発表を通して自分が注目された体験が自己有用感につながり、自信を持ってコミュニケーションが取れるようになったことで、自分を冷静に見つめ直す力が高まってきていると思います」

◉3年生での取り組み

企業・大学訪問をし将来像を膨らませる

3年生での総合学習は、1・2年生と積み上げてきた活動の集大成だ。柱は修学旅行を利用して行う企業・大学訪問。東京（12年は九州）の企業を班ごとに訪問し、仕事内容ややりがいなどを聞く。その後、近隣の大学を訪れ、学食で学生に交じって昼食を食べる。

「生徒に高校から大学、就職へ向かう道筋を具体的に伝えられない家庭もあるので、大学がどのようなところなのかを、生徒が少しでもイメージできるように昼食会場を大学にしました」（森下先生）

訪問後は、職場体験と同様、体験を基に「社会に役立つ物・制度・取り組み」を考え、ポスターセッションを行う（**図3**）。1・2年生での経験があるため、生徒は手際よく論文をまとめ、発表もしっかり出来るという。

3年間の総合学習の積み重ねにより、生徒の進路に対する意識は大きく変わった。「A高校に進んでポスターセッションを続けたい」「エンジニアになるためにB工業高校に行きたい」というように、目的意識を持って進学先を選ぶ生徒が増え、志望校選びを始める時期も早くなった。また、学力面でも成果が見え始めていると、衛藤校長は話す。

「特に学力中・上位層の学力が伸びました。学力下位層ではまだ数値面の変化は見られませんが、定期考査や『全国学力・学習状況調査』での無回答率が大幅に減ってきています。問題をしっかり読み、取り組もうとする意欲は高まってきていると感じます。継続して取り組むことで、全ての生徒の学力や学習意欲を高められるのではないかと考えています」

教師にとって特に予想外だったのは、成績上位層の成長とその波及効果だ。

「正直なところ、ポスターセッションは本校の生徒には難し過ぎるのではないかと思っていました。しかし、ひとたび取り組んでみると、生徒は多方面で個性を発揮することが分かりました。まず、成績上位層が飛躍的に成長しました。自分の好きなテーマを設定できるとあって、率先して取り組み、能力を存分に発揮していったのです。その姿に刺激を受けて、周りの生徒たちも変化していきました。『私ももう少し何か考えてみよう』と自主的に工夫を始めたのです。『この子がこん

図3 3年生のポスターセッションのテーマ例

- 塩分や糖分を計る機械
- 婚姻学習奨励制度
- ナビゲーション車椅子
- 体が不自由な方でも着やすい服
- 排気ガスを減らすシステム
- 京都に新路線を増やす
- 食物を無駄にしないシステム
- 床発電について
- 飲酒運転をなくす
- 自転車での交通安全
- 地熱暖房機
- 物置型野菜栽培機
- 宇宙発電所

＊同校の資料から編集部が抜粋して作成

なことを考えられるんだ』という生徒がどんどん増えていきました。そして、学年全体に自主的に取り組む雰囲気が広がっていったのです。改めて、全ての生徒に挑戦の場を与えることが大切だと感じました」（西本先生）

◉進路指導の工夫

3年間の総合学習で生徒の夢や志に対する理解を積み重ねる

生徒の変化に応じて、教師の進路指導も変わった。以前は3年生の進路選択の時期になって初めて、普通科や総合学科などの違い、文系・理系の違いなどを教えていた。進路を決められない生徒には「○○が向いているんじゃないか」などと、教師主導で志望校を決めていくことも少なくなかったという。

「教師主導の進路指導では、教師に決められたという気持ちが強くなり、小さな不満から高校を辞めるということにもなりかねません。今は『○○高校に行きたい』という生徒に対して、『そのためにどういう準備が必要か』というところから指導が出来るようになりました。教師は情報を提供し、一緒に考えますが、最終的な決断は生徒自身がします。自分で決めることが進学後のモチベーションにつながると考えるからです」（西本先生）

こうした指導が出来るのは、1年生からの指導の積み上げがあると、森下先生は話す。

「レポートやポスターセッションでの発表は、生徒の夢や志の積み重ねです。担任団も生徒が3年間思い描いてきた将来像を把握しているので、面談で改めて興味・関心や適性を探っていく必要はなくなりました」

総合学習で積み上げてきた生徒把握の実績が、教師の進路指導力の向上ももたらしているのである。

苦境に立たされた時にこそ前に進もうとする力を育てたい

いくら思いが強くても、何かしらの事情で諦めなければならないこともある。それでも、生徒は前向きに高校生活を送ることが出来るのか。西本先生は次のように考えている。

「たとえ志望校に手が届かなくても、教師がカリキュラムを見せ、きちんと情報を伝えれば、『この学校でも同じような勉強が出来る』と、生徒は志望校を変えることにも納得します。3年間の探究活動を通して、人生にはいろいろな道筋があり、ゴールまでの道のりは人それぞれであることを、生徒が理解するようになったからこそ、不安に陥らず、意欲的に前に進めるのだと思います」

学力ありきではなく、あくまで生徒が描く将来像や興味・関心を大事にして、高校の指導方針やカリキュラムとのマッチングを図っていくことが重要なのだ。進路決定の段階で多少道筋が変わったとしても、自分の夢に向かって進んでいるという確信さえあれば、生徒のモチベーションが下がることはない。

「最近の生徒の傾向として、自分で考える、自分で決定する力が弱いというのはあります。しかし、それは大人がそういう機会を子どもに与えてこなかったことが大きいのではないでしょうか。中学校の進路指導にも、成績を見て『ここくらいだろう』という指導で済ましてきた側面があることは否めません。しかしだからこそ、その反省を踏まえ、生徒が自分の頭で考え、自ら進路を選択していけるように、3年かけて計画的に育てていくことが大切だと思います」（西本先生）

校長が考える進路選択力を育む工夫

高校進学は人生における重要な選択の1つですが、往々にして、それで将来の全てが決まってしまうかのように教師も生徒も思いがちです。中学時点の指導で重要なことは、将来像や目標までの道筋を自ら描き、そこに向かって努力する姿勢を身に付けさせることです。これからは知識だけでは生きていけない時代になると思います。生きていくためには、アイデアや発想が必要です。苦境に立たされた時に、どれだけ自分の頭で考え切り抜けられるか。それが出来るようになるための経験を少しでも中学校から積み重ねさせたいと考えています。

学校事例 2

データによる客観的な自己分析と計画的な学習で自己統制力を育む

佐賀県 鳥栖市立田代中学校

鳥栖市立田代中学校では、学校生活のあらゆる活動をキャリア教育と関連付け、自ら考え行動する生徒の育成を目指している。活動の過程では、定期的に自らの取り組みに関する意識や実態調査を行い、教師の生徒把握の他、生徒が自らの取るべき行動や選択を考えられるように促している。

学校生活のあらゆる場面をキャリア教育の機会と捉える

鳥栖市立田代中学校は、学校教育目標に「夢や目標をもち　主体的に学び行動する生徒の育成」を掲げ、キャリア教育の視点を重視した教育活動を行っている。しかし、池之上義宏校長が考えるキャリア教育は、職業調べや職場体験といった進路学習にとどまらない。

「私は、日本の教育の弱点はキャリア教育にあると思います。本来のキャリア教育は、朝のあいさつに始まり、授業、掃除、学校行事など、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の人間関係形成力や自己管理能力、課題対応能力などを高めていくべきものだと考えます。しかし、多くの場合、取り組みはそれぞれに行われ、相乗効果を発揮していないようです。生徒指導や教科指導にもキャリア教育の視点を盛り込み、生徒が学校で得た体験を、自分の生き方や毎日の生活に落とし込む機会を、出来るだけ多く用意することが重要だと考えています」（池之上校長）

このような考えを持つ池之上校長の下、2009年度から「田代中　みんな頑張るAMB！」を合言葉に生徒指導や教科指導のさまざまな場面で生徒の主体性や社会性を育む取り組みに力を注いでいる。Aは「あふれる笑顔に　元気なあいさつNO.1」、Mは「磨こうよ　校舎ピカピカ　心もピカピカ」、Bは「勉強は計画的に頑張ろう『継続は力なり』」のそれぞれ頭文字だ。その具体的な取り組みを見ていこう。

◉生徒指導での取り組み①
田代中版「マナー検定」で人間関係における礼儀の重要性を認識させる

生徒指導は、学校生活の土台となる力を生徒に築くものとして、どの学校でも重視しているが、同校では服装やマナー、清掃活動を

School Data

◎1947（昭和22）年開校。サッカーの街鳥栖市北部のベッドタウンに立地する。2012年度、鳥栖市より小中一貫教育の研究指定を受け、近隣の小学校3校と連携事業を推進。

校長◎池之上義宏先生

生徒数◎ 554人　学級数◎ 18学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒841-0016　佐賀県鳥栖市田代外町651-1

TEL◎ 0942-83-2758

URL◎ http://www3.saga-ed.jp/school/tasiro-j/

公開研究会◎ 未定

キャリア教育の一環としても位置付け、学校全体で指導している。

中心となる取り組みは、同校が独自に計画・実施している「マナー検定」だ。社会生活における礼儀の大切さを伝え、望ましい話し方や作法を学ばせることで、人間関係を築く力を育むことをねらいとしている。

検定は年2回。校長、教頭、主幹、教務主任が面接官となり、生徒は5人1組で校長室で面接を受ける。面接では「みんな頑張るAMBのAは何ですか」などの質問をして学校目標を確認し、その目標の下で今、自分が頑張っていること、そして将来の夢などを尋ねる。生徒は普段、校長室に足を踏み入れる機会があまりないこともあり、緊張した面持ちでそれぞれ準備しながら面接に臨むという。

「緊張していても、その場に相応しい話し方と作法で自分のことをしっかり語ることは、高校受験でも社会に出てからも求められる大切な力です。面接の準備は、高校受験の直前に行うのではなく、1年生から計画的に行い、生徒の力を伸ばすべきです」（池之上校長）

評価は、担任が面接の様子を観察して行う。評価項目は入退室時の態度や話し方などで、ABCの3段階だ。1年生は初級、2年生は中級、3年生は上級とし、2回目の評価に基づいて認定する。B以上が合格で、Cだった生徒は追試を受けるが、これまで該当者は1人もいない。

図1　「マナー検定」自己点検表

第1回マナー検定　自己点検表　　年　組　号氏名

日頃から、身だしなみ・服装はきちんとできているかな？検定を受ける前に自分を見つめてみよう。

点検項目	○△×	点検項目	○△×	点検項目	○△×
髪の長さ（前）		まゆ		制服の下	
髪の長さ（横）		名札		ベルト	
髪の長さ（後）		生徒手帳（カード）		スボン・スカートの長さ	
髪の色		つめ		靴下	
ピンやゴム、止め方		ボタン・ホック		上靴	

マナー検定を振り返って　　年　組　号氏名

マナー検定はどうでしたか。ここでもう一度自分自身を振り返って、人としてのマナーを考えこれからの自分にプラスになるよう身につけていきましょう。

1．緊張せずに検定を受けましたか。　緊張しなかった　少し緊張した　緊張した

2．今日の検定はできましたか。　よくできた　だいたいできた　難しかった

3．今日の検定で自分にまだできていないことは何ですか。

4．日頃からマナーや作法を意識して、集団生活を送っていますか。
いつも意識している　意識している　余り考えたことはない　考えたことはない
どんなことを意識していますか？

5．マナーはなぜ必要だと思いますか。

6．あなたは、今の自分は世の中に出て通用すると思いますか。
・入試や入社試験の面接を乗り切ることができるだろうか。
・また社会人として扱ってもらえるだろうか。
ズバリ！あなたのマナー度は何点？　/100点

7．今日の検定は、今後どんなことに生かせそうですか。

マナー検定後に生徒が自己評価をする。検定の意義を理解し、次に向けて意欲的に頑張る生徒が多い　＊同校の資料をそのまま掲載

マナー検定では事前事後指導も徹底して行っていると、教務主任の篠田桂子先生は話す。

「検定前には外部講師によるマナー講話を開き、聞いた内容について話し合ったり、面接での質問の答えを書かせたりしています。そして、事後には生徒に面接での受け答えを自己評価させ、客観的に自分を見つめさせます（図1）。日常生活での自分の振る舞いが他者にどのような印象を与えるのか、非言語コミュニケーションとしてのマナーの重要性を見つめ直し、より良い人間関係を築くために何が大切なのかを考えられるように指導しています」

鳥栖市立田代中学校校長
池之上義宏 いけのうえ・よしひろ
「自分の子どもを行かせたいと思えるような学校をつくりたい」

鳥栖市立田代中学校
篠田桂子 しのだ・けいこ
教務主任。「子どもの様子をしっかりつかみ、先生方と共通理解を図り、取り組みを進めるよう心掛けている」

鳥栖市立田代中学校
佐野公法 さの・きみのり
生徒指導主任、理科担当。「周りが見えなくなるくらい一生懸命に頑張る生徒になってほしい」

◉生徒指導での取り組み②
掃除の大切さを理解させることが自主性や責任感を育む

もう1つ重視する取り組みは掃除だ。生徒が主体となって清潔な環境をつくることで、自らの生活環境を整える力を育むのである。

「私たちはともすれば、掃除で生徒にどの

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

ような力を付けたいのかを考えず、きれいになったかどうかだけで評価し、指導しがちです。しかし、清掃活動は重要な自主管理能力を育める場です。そのことを教師が皆、理解し、生徒の掃除に対する姿勢を育てたいと考えています」（池之上校長）

毎年10月中旬の2週間は掃除強化週間とし、掃除の重点事項を示して、なぜ掃除をするのかを理解させる。地域共同体における掃除の重要性という歴史的意義から説き起こし、掃除をさぼるのがなぜいけないのか、まじめに掃除することの意味を説く。生徒指導主任の佐野公法先生は次のように語る。

「生徒が自分の生活について考える場を、教師が設定し、それを見取って評価や声掛けが出来るかが、生徒の主体性や責任感を育む上で大切だと考えます。掃除のような日常の営みも、その意義をきちんと教えることで、生徒にとって価値ある取り組みになるのです。指導によって、掃除は『させられるもの』ではなく、『自分たちでするもの』という意識が浸透していくのを感じています」

掃除についての意識調査では、「掃除の手順は分かっているか」「協力して取り組んでいるか」などの項目で、どの学年も「いつも」と「ときどき」を合わせて9割以上に達する。自由記述欄には「いつもより集中できた」「校舎がきれいだと心も落ち着く」といった意見が書かれている。

◉教科指導での取り組み

定期考査の学習計画を立てさせ自律的な学習を促す

教科指導では、定期考査に向けた学習計画を立てる取り組みを、11年度から全学年で年4回の全ての定期考査で実施している。生徒把握のために行う調査結果から、生徒の自己統制力の低下が明らかになったためだ。

「本校の学力は地域の公立学校の中で上位にありますが、調査で自己統制力が全国平均を下回る結果となりました。また、アンケートでも『計画を立てて継続的に学習している』という生徒は約6割にとどまっていました。今の生徒はメールやインターネット、ゲームなどさまざまなものに囲まれ、勉強や部活動に力を注ぐためには何かを我慢することになります。生徒は学習が続かないのではなく、誘惑に負けて学習をやめてしまうのです。計画通りに学習に取り組めた生徒は、たとえ結果に結び付かなくても、『計画通りに出来た』という達成感が次の意欲につながるのではないかと考えました」（池之上校長）

「定期テストのパッケージ化」と名付けた取り組みの手順は次の通りだ。

❶定期考査2週間前に出題範囲が確定したら、学年集会などを利用して「テストガイダンス」を実施し、教科担任が出題範囲と達成目標を説明する。生徒はそれを聞きながら、大事だと思う点をシートに書き込む。

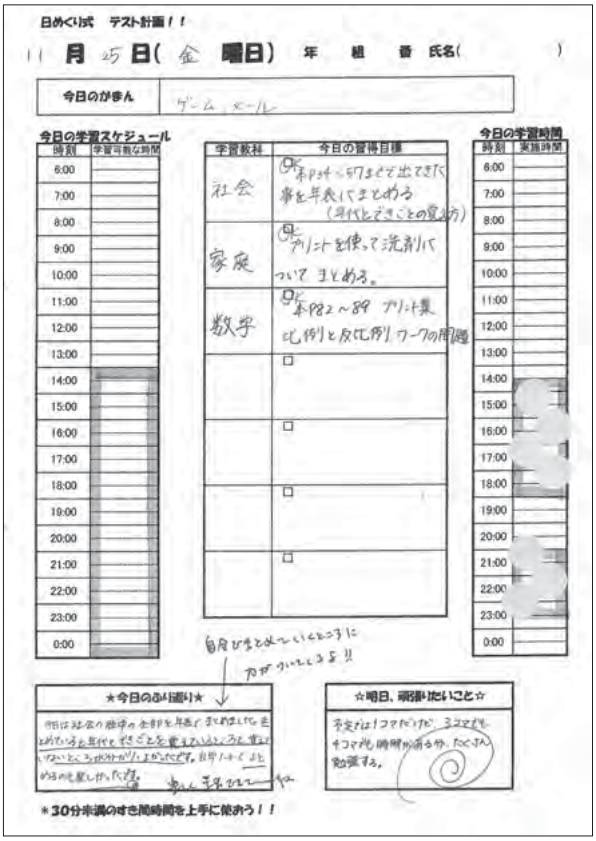
❷各教科の出題範囲と、内容のまとまりごとに達成目標を示した「ナビゲーション・シート」を配布。生徒は達成目標一つひとつに対して理解度を4段階でチェックする。

❸自分の理解度を踏まえて、各教科の目標を決め、学習計画を立てる。計画表の様式は、2週間の全教科の計画が一目で分かる「カレンダー式」と、1日ごとに取り組む教科や内容などを記す「日めくり式」（P.20図2）があり、生徒は好みに応じて選ぶ。また、どちらの計画表にも「今日のがまん」という欄があり、1日の学習目標、計画を達成するためにその日、我慢するものを自分で決めて決意表明をする。

❹定期考査終了後は、ナビゲーション・シートの振り返りをし、自分が立てた目標の達成状況を確認する。生徒は点数や順位ばかりを気にしやすいが、目標や計画が達成できたかという視点でテストを振り返らせることで、自己統制力や計画立案力、遂行能力を客観的に評価させる。

取り組みの最終目標は、生徒が自分の学びのデータを振り返りながら、「これまでの自分の勉強の質と量は○○だったけれど、今回のテストではもう少し上位をねらうために、●●を増やし、学習計画も△△のように改善しよう。更に、■■を我慢しよう」と自ら計画を立案、実行できるようになることだ。

図２　「日めくり学習計画表」



取り組む教科と内容、時間などを１日単位で詳細に記載する。「今日のがまん」にはメールやインターネットを挙げる生徒が多い
＊同校の資料をそのまま掲載

「社会に出れば、自分のやりたい仕事だけが出来るわけではありません。むしろ会社や組織の要望に従うことの方が圧倒的に多く、やりたいことが出来るようになるまでには、多くの我慢を強いられます。また、周りがその人に求めていることは、本人が考えるよりもはるかに多く、仕事によって自分でも気付かない力が引き出されることもあります。自己統制力は社会をたくましく生きていく力の土台になるのです」（池之上校長）

◉生徒把握の工夫

調査結果を学年団で分析し生徒の内面を浮き彫りにする

生徒の自立や社会性を育む取り組みをさまざまに行う同校では、生徒の成長や心理状態の把握にも力を注ぐ。教師による見取りも重視するが、客観的な把握もするために、前述の掃除に関する意識調査、学校独自の「生徒目標アンケート」、学力・知能偏差値、学習適応性検査（ＡＡＩ）、学級集団の状態を把握するための心理検査のＱ-Ｕなどを行う。

「キャリア教育の視点でどれだけ生徒が成長しているかを測るためには、教科学力に加え、多角的なデータを積み上げ、生徒の意識や身に付けた力の到達度を客観的に把握していく工夫が必要です」（池之上校長）

生徒目標アンケート（年４回実施）は、生徒の行動目標である「ＡＭＢ」の達成状況を測る。質問項目は、「将来の夢や目標を持っているか」「笑顔で元気なあいさつをしているか」「一生懸命、掃除に取り組んでいるか」「計画を立て、継続的に学習しているか」の４つ。調査結果は全校平均、学年別平均、経年変化をグラフ化し、生徒にも公表する。友だちや先輩と比べて自分はどうなのかを知ることで、「みんな、夢を持っているんだ」「平均よりもあいさつが出来ていないから頑張ろう」というように、生徒が自分を客観的に見つめ、主体的な生活改善を促すのが目的である。

また、これらの調査結果は教師の目線合わせのツールにもなっている。学力・知能偏差値、ＡＡＩ、Ｑ-Ｕなど、調査結果を１つにまとめて、生徒一人ひとりの状況を多角的に把握できるようにしている（**図３**）。調査結果が出揃う９月には、各学年団で集まってデータを検証し、生徒個別にどのように支援していくのかを話し合う。

生徒が回答したアンケートは自己評価であるため、自分に厳しい生徒の数値は低くなり、自分を客観的に評価できない生徒の数値は高くなる場合もある。事実、データを見た担任が「このクラスはこれほど良くない」「すごく良いクラスなのに」と、実際の姿との違いを感じることも少なくないという。

「データが現状を正確に反映するものではないことは確かですが、生徒の『思い』は表れます。教師が見た生徒の様子と、生徒自身

主体的な進路選択――自らの意思と責任で決める力を育てる

図３　4つのテストの分析による実態把握　知能検査を切り口とした分析の例

氏名	知能検査	NRT	AAI・所属群					Q−U・所属群						支援の視点	個別の支援策
	偏差値	学力偏差値	AAI	Ⅰ バランス	Ⅱ 学力向上	Ⅲ 学習適応性	Ⅳ 個別支援	所属学級満足度	満足群	非承認群	侵害行為群	不満足群	要支援群		
A	50	36	47	○				56	○					NRT	苦手教科の個別カウンセリング
B	63	50	46	○						○				Q−U	担任・教科担任による承認 認める　話を聞く
C	70	54	70	○					○					NRT	苦手教科の個別カウンセリング 得意科目の伸長
D	51	38	56		○						○			Q-U·NRT	侵害行為群は要注意 丁寧な対応が必要
E	34	31	39				○	62				○		Q−U	担任・教科担任による承認
F	61	48	60	○					○					NRT	苦手教科の個別カウンセリング 自己肯定感を上げる

分析の手順

1. 知能検査、ＮＲＴ（標準学力検査）、ＡＡＩ（学習適応性検査）、Q-Uデータの結果を、生徒ごとに一覧表にする。今回は、知能検査でアンダーアチーバー群の生徒を抽出
2. 他の３つのテストの所属群を見て、生徒を支援する糸口を「支援の視点」として焦点化
3. 「支援の視点」に基づいて「個別の支援策」を立てる
4. 更に、データの数値を見て、苦手克服、長所の伸長などの力点を明確にする

上記の分析は、知能検査の結果を軸として、課題のある生徒を見付け、他のテスト結果と照らし合わせて課題を探り、支援策を考えた。この方法では、特に支援の必要がない生徒も明確に出来る

＊同校の資料を基に編集部で作成

の思いの差から、必要な指導が見えてくるのです」（池之上校長）

例えば、偏差値が高いにもかかわらず自分の能力に自信を持てない生徒には「苦手教科の個別カウンセリング、自己肯定感の向上」、学力は高いが学級満足度が低い生徒には「ストレスの発散」といった支援策を立てて担任間で共有している。

キャリア教育やデータ共有の仕組みを小中連携に活用

学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の主体性の育成に取り組む田代中学校。一連の取り組みにより、夢や目標を持ち生活態度も整った生徒が増えている。生徒目標アンケートの結果を見ても、将来の夢や目標を持っている生徒は全学年平均で79％、あいさつが出来ている生徒は91％、一生懸命掃除に取り組んでいる生徒は87％に達している。

今後は、校区内の３つの小学校にもＡＡＩ、Q-Uを導入し、調査結果を小中で共有して９年一貫の連続性の中で子どもの状況を把握し、指導に生かしていきたい考えだ。これに先立ち、12年度はマナー検定を各小学校で始めた。

「小学校時代にはきちんとあいさつができ、クラスに溶け込めていた子が、中学校に入った途端、出来なくなってしまうというケースがありますが、それは子ども自身の変化もさることながら、教師のかかわり方にばらつきがあるからとも考えます。９年間で子どもの成長を把握し、小・中学校の教師が共通理解を持って指導に取り組むことで、生徒に何が必要なのかがより鮮明に見えてくると期待しています」（池之上校長）

校長が考える進路選択力を育む工夫

勉強だけをしていたら、その範囲には力を発揮するかもしれませんが、社会観が狭く、変化に柔軟に適応する力は不足しがちです。予測不可能な世界をたくましく生きていく力を付けるため、自分を客観的に見つめ改善する訓練を、教育活動のさまざまな場面で意図的・計画的に仕掛けることを重視しています。

自分で必要なものを選ぶ力、欲望を制御して計画を遂行する力、自分を客観視する姿勢を身に付け、どうすればよりよい自分に近づけるのか考え、主体的に行動できる生徒を育てたいと考えています。

学校事例 3

「大変でも頑張る」経験を通して自らの選択に責任を持たせる

東京都 福生市立福生第一中学校

以前は、生徒の「荒れ」が目立っていた福生市立福生第一中学校。生徒に規律を守ることを徹底させることから始め、次第に班活動を増やし、生徒が自ら行動する場面を増やしていった。学校が落ち着いてきた今、指導は次の段階に移ろうとしている。

二分していた指導方針を一本化 生徒の落ち着きを取り戻す

2009年度、新藤美知子校長が福生市立福生第一中学校に赴任した時、生徒の「荒れ」に対する教師の指導は二分していた。授業中に教室を抜け出したり、集会にきちんと集まらない生徒に対し、一人ひとりとじっくり話して諭す教師がいる一方で、一律のルールを定め、守らない生徒には厳しく指導する教師がいた。

新藤校長が1年間、生徒を見取った結果、主体的に考える力が育っていない生徒が多いために荒れが起こるのだと判断。まずは学校生活上のルールを明確に定めるべきと考え、その方針を教師に伝え、指導の一本化を図った。新藤校長はこのように振り返る。

「教師によって指導に多様な価値観があってよいと思いますが、本校の場合、生徒指導が厳しい状況にあったため、全ての生徒が守るべき一線をはっきりさせ、それを浸透させることが先決だと考えました。教師間でルールをしっかり共有し、組織的な指導を徹底しました」

こうして、10年度、生徒に対する指導はより厳しいものに転換した。

生徒に中学校生活の心構えを伝える最初の機会は、入学直後に行う2泊3日の「スプリングスクール」だ。初日に、中学校での生活や学習は小学校と異なることを伝え、集団の一員として判断し、行動することや中学生としての自覚を求める。また、学習は朝から夜まで9時間を課す。入学したばかりの中学生にとって負担の大きい行事であるが、こうした3日間の共同生活を通して、「服装や時間のルールは絶対に守る」「目標に到達するために必要な勉強は必ずしなければならない」といったことを徹底していく。

日常の指導も厳格化した。例えば、集会に

School Data

◎1947（昭和22）年開校。教育目標は「健康で思いやりのある人を目指し、①すすんで学びよく考えよう、②正しく判断し実行しよう」。2、3世代が通う家庭も多く、地域社会と連携して教育の充実を図る

校長◎新藤美知子先生

生徒数◎ 475人　学級数◎ 16学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒197-0003 東京都福生市熊川845

TEL◎ 042-551-0321

URL◎ http://academic4.plala.or.jp/fussa-1j/

公開研究会◎ 未定

主体的な進路選択――自らの意思と責任で決める力を育てる

少しでも遅れた生徒を厳しく叱る、授業中は教師が廊下を見回り、抜け出している生徒がいたら教室に返す。床にガムの包み紙が落ちていたら、捨てた生徒が名乗り出るまで許さない――。生徒と教師の根競べのような指導が続くうちに、次第に生徒の間に「先生は絶対に妥協をしない」という意識が浸透し、学校は落ち着きを取り戻していった。

「今では、集会は整然と進み、授業を抜け出すような生徒はいません。『荒れ』は克服できたといえるでしょう。しかし、それは表面的なもので、教師が『型』を崩さないように必死に指導しているからであり、生徒が自ら考えて行動しているわけではありません。校内が落ち着いた今、次の段階として、『変わる一中から磨く一中』を目標とし、生徒一人ひとりを磨いて、自己判断する力を育てたいと考えています」（新藤校長）

◉自立を促す工夫①
小集団でのリーダーを育て責任感や自主性を芽生えさせる

生徒を磨く取り組みとして11年度に始めたのは、小集団のリーダーの育成だ。

各クラスに6つの班を設け、自薦や他薦、担任の指名などによって班長を決める。班長は、提出物の回収や清掃の指揮など、生徒会が中心となって決めた作業を担う。班長の役割を明確にして作業を任せることで、リーダーシップを芽生えさせようというわけだ。班長は、毎日、帰りの会の後に行う10分間の学習タイム（**写真1**）で、プリントを採点して回収する役割も担う。こうした役割の積み重ねにより、次第に班長は班への責任感を抱き、班をよりよくする方法を自ら考えるようになるという。

班長以外の生徒にとっても、班はいわば共同体となり、互いに教え合ったり注意し合ったりする関係が生まれているという。3学年主任の田中雄二先生は次のように話す。

「自分1人では善悪の判断が難しくても、班で話し合うことでよい方向に進むこともよくあります。また、多少つらいことがあっても、他のメンバーが一緒であれば頑張れることもあるようです」

班活動は、学習にも好影響を及ぼしている。数学などのグループ学習も班ごとに行っており、班長を中心に自然に教え合う姿が見られるようになった。

「『友だちから教わることは、決して恥ずかしくない』と思うようになり、自分から意見を出すことにも積極的になりました。試験前には、友だち同士で教え合う光景が当たり前になりました」（田中先生）

12年度は、全学年の班長を集めた班長会議を実施する予定だ。班長同士が話し合い、学校の課題を考えたり、班運営がうまくいかない班長に対して上級生の班長がアドバイスをしたりする場にしたいと考えている。

「これまでは教師が全てを指導していましたが、班を基本的な行動単位として、少しずつ生徒の自治に委ねていきます。自分たちで

福生市立福生第一中学校校長
新藤美知子 しんどう・みちこ
「日々全力で生徒に接する。少しでも、常に前に進む気持ちを持ってほしい」

福生市立福生第一中学校
田中雄二 たなか・ゆうじ
3学年主任。「親や自分を支えてくれている全ての人たちに対する『愛』を大切にする生徒を育てたい」

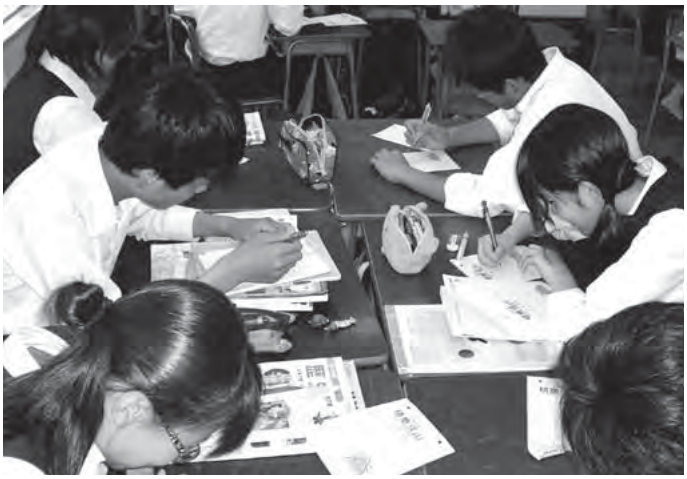


写真1　帰りの会が終わると10分間の学習を行うが、班で机を寄せ合って取り組む。ここでも、分からない問題を教え合う姿が見られるという

考えられるようになった段階で、徐々に『型』を外して自立させたいと考えています」（新藤校長）

◉自立を促す工夫②
保育園や福祉施設での体験学習を通して自己肯定感を高める

生徒の精神面の成長を促すために、11年度からは2年生で行う職場体験の訪問先を保育園や高齢者福祉施設に限定し、一緒に遊んだりお世話をすることを通して勤労観を育む取り組みを進めている（**写真2**）。体験先を限定したのは、勤労観を育てるために、活動を通じて自己肯定感も併せて高めたいというねらいがあったからだ。

写真２　保育園での職場体験の様子。生徒は小さな子どもたちと一緒に遊び、慕われるうちに、自己肯定感を高めていく

「小さな子どもから『お兄ちゃん』と慕われたり、高齢者から感謝の言葉を言われたりする体験によって、自分も誰かを助けたり喜ばせたりすることが出来るのだと感じると共に、それが自分自身の喜びにもなることに気付きます。このような気付きを働くことの喜びや将来を考える意欲につなげたいと考えています。普段は落ち着きのない生徒も、体験活動では相手の立場を考えて行動している姿を見ると、『やれば出来る』ということを改めて感じます」（田中先生）

12年度は、2年生だけでなく、3年生に卒業前にもう一度、「奉仕体験」として同じ施設を訪問させる計画だ。

「再び保育園を訪れ、子どもの成長に触れることで、自分自身の成長を振り返る機会にしてほしいと思います」（田中先生）

◉自立を促す工夫③
次への目標を立てられるように評価の説明を行う

生徒の自立心を高めるために、評価に伴う説明も重視している。

「評価は、生徒がその結果をしっかり受け止め、自分の中で消化して、評価が悪ければやり方を改善する、良ければ新たな目標を立てるなど、次のステップに結び付かなければ、意味がないと思います。評価を次の目標設定に生かせる生徒もいますが、大半の生徒は、数字に一喜一憂するだけで終わってしまいます。そうならないように、評価規準などについて、生徒や保護者に具体的に説明するように努めています」（新藤校長）

年度初めには、教科ごとに評価の観点を確認し、定期考査、授業態度、ワークシートなど、どの要素をどれくらいの割合で評価するのかを生徒や保護者に説明する。また、学習から逃げがちな生徒には、日頃から声掛けや補習をし、学びに向かうきっかけづくりを徹底して行う。

以前、ある教科の評価が「1」だった生徒の保護者が、強い調子で教師に説明を求めてきたことがあった。その際、評価規準を明確に示して「1」となった理由を説明すると、生徒が「自分なりに頑張ったが、努力が足りなかった。自分が始めるのが遅かった」と納得したことで、話し合いも収まったという。

「評価は単に学習の結果を伝えるものではなく、生徒が自己を振り返る材料となるものです。だからこそ、妥協せずに評価し、正確に伝える。その代わり、日々の指導においては全力で生徒の頑張りを支援する。そうした姿勢で教師が生徒と向き合い続けることが、生徒との信頼関係をつくり、更に評価を受け止める心もつくると考えています。まず現状の自分を受け止め、自己を見つめ直すことが、主体的な行動や選択を促していく上での第一

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

歩となるのではないでしょうか」（新藤校長）

◉生徒把握の工夫

特別支援教育の視点から生徒個別のサポートも導入

ただ、教師の知識と指導力だけでは、生徒の課題を克服し、自立させていくことが難しい場合もある。そこで、同校が全学年に取り入れているのが、特別支援教育の視点だ。ルール厳守の指導によって全体的には成果を上げたが、中には繰り返し指導をしてもなかなか改善が見られない生徒がいた。仮に発達障害などの課題を抱えているのであれば、個別の支援が必要だと考え、専門家のアドバイスを受けて指導に当たるようにしたという。

「専門家のアドバイスを受けて生徒の課題が明確になったことで、教師の指導方法が変わり、状態が改善した生徒もいました。学校全体に特別支援教育の視点を取り入れることは、指導面だけでなく、予算や保護者への説明の面でも勇気のいる決断でしたが、生徒の将来や進路を第一に考えた時、早期に課題を発見し、中学校でも出来る指導を行うことが必要だと考え、導入を決定しました。これからも専門家と連携を続けていきたいと考えています」（新藤校長）

また、11年度からは、早稲田大の管野純教授が開発した生徒の心理調査「KJQ調査」（図）も導入している。これは生徒の志向を分析するテストで、生徒にとっては自己理解の手掛かりとなり、教師にとっては生徒の内面把握に活用できるものだ。データを活用した指導のメリットを田中先生はこう語る。

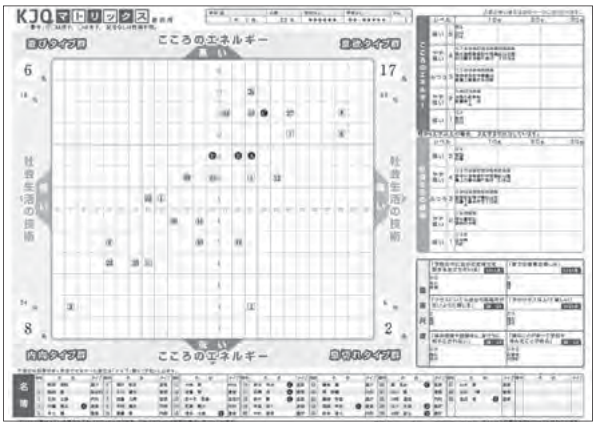
「教師が生徒を見る感覚と結果は一致する部分が多く、指導の裏付けとして活用できると思いました。もちろん、教師が気付いていなかったけれども、調査結果ではある偏った傾向が見られた生徒もいました。生徒に必要な指導を考えていく上で、こうした客観的なデータは手助けになっています」

「大変でも頑張る」自己選択に責任を持てるように

以前は高校を中退する卒業生が少なくなかったが、「荒れ」が収まってからはそうした卒業生は急速に減った。「型」を完全に取り外せる段階までには至っていないが、教師の努力によって「ルールを守る」「頑張れば出来る」「困難があっても頑張る」と考える生徒が増えてきているからだと、新藤校長は捉えている。

「自己の選択に責任を持ち、進路先で頑張れる力をいかに付けていくかは、今後も重要な課題です。中学校だけではなく、家庭や小学校、また行政との連携を大切にしながら、生徒にとって必要な教育を考えていきたいと思います」（新藤校長）

図　「KJQ調査」教師用帳票



「KJQ マトリックス」（実務教育出版）の教師用帳票。「こころのエネルギー」と「社会生活の技術」のバランスにより４つの群に分けている
＊実務教育版社提供の資料をそのまま掲載

校長が考える進路選択力を育む工夫

良くも悪くも、生徒たちは、互いの結び付きがとても強いものです。悪い集団に入れば悪く染まってしまいますし、逆に良い集団なら良く染まります。そして、生徒は、教師の指導の言葉よりも、生徒同士の関係から強く影響を受けます。こうした関係性を利用して、まず、生徒が互いに話し合いながら良い方向に自己決定が出来る集団をつくり、そこから個々に自立させるように導いていくことが必要だと考えています。そのようにして獲得した自己決定の力は、社会に出てからの進路選択にも役立っていくと思います。

まとめ

「主体的な進路選択」を育む指導に向けて

最後に、京都大・塩瀬隆之准教授のインタビューと3校の実践事例を通した編集部からの提案と自らの意思と責任で進路を選択していく力を育てるための指導のポイントをまとめた。

今回の特集を通して編集部が伝えたいこと

「必要感」の醸成と「決める」場面が設定されているか

今号では、「自分の意思で主体的に物事を判断したり、選択していくことが出来ない生徒が多い」「中学生にとって最も大きな選択の1つである『進路指導』に対する学校の求心力が低下している」という先生方の声を受け、これからの中学校で必要になる進路指導やキャリア教育について考える特集を組んだ。

塩瀬隆之准教授や3校の学校現場の取材を通して見えてきた「主体的な進路選択」に向けた指導のポイントは、大きく2つあったように思う。

1つは、日々の教育活動の中で、進路を主体的に考える「必要感」をどれだけ醸成できているかということである。京都市立大宅中学校の職場体験と探究活動を関連させた取り組みには、単なる体験活動で終わらせるのではなく、体験を通じて生徒目線で更に社会に役立つモノや仕組みを考えさせながら、学ぶこと（自分の頭で考え、工夫すること）と働くことのつながりを意識させる指導の工夫がなされていた。また、福生市立福生第一中学校は、誰かのために主体的に動いたり、物事を判断しようとする意欲を育てるためには、まず生徒の自己肯定感や自尊感情を高める必要があるという考えの下、職場体験先を選定し、活動を実施していた。

2つめは、教育活動の中に、生徒自らが物事を選択・決定する場面をどのように設定するかということだ。この点について、塩瀬准教授は、選択肢の設定の仕方や教材の工夫を通して、鳥栖市立田代中学校は、客観的なデータを活用した自己の振り返りや勉強計画の立案・修正という課題を通して、生徒自身に選択・決定させる場面づくりのヒントを示していただいたように思う。

「単に生徒に決定させたり、客観的な評価に沿って指導をしているだけでは、『進路相談』に過ぎず、『進路指導』ではない。生徒の選択力を高めようとする計画的な指導の上に、選択の機会が与えられてはじめて、生徒は主体的な選択が出来る。そこまで指導をするから『進路指導』なのだ」――これは弊誌を応援してくださっている校長先生の言葉であるが、まさにこのような信念を持った先生方の日々の選択力を育む取り組みや、進路意欲を育む関係づくりがあってはじめて、生徒は主体的に進路を選択していくことが可能になるのではないだろうか。

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

インタビュー・3校の取り組みに学ぶ「主体的な進路選択」に向けた指導のポイント

選択の不安やモヤモヤと向き合う訓練を積ませる

進路はいったん決まったとしても、本当にそれで良かったのかどうかモヤモヤと悩み続けるもの。大切なことはモヤモヤを解消することではなく、モヤモヤを抱えながら前に進んでいける耐性をいかに身に付けさせるかにあると、**塩瀬隆之准教授**（P.8）から指摘があった。

耐性を育てる指導の工夫として、塩瀬准教授は「進路選択後の進路指導」を挙げる。具体的には、生徒に自分の選択について教師や後輩に語らせることを通して、自分の選択を受け入れる機会をつくるというものである。卒業生が後輩のために高校の説明をする取り組みはよく見られるが、卒業直前の3年生が「進路を前向きに受け入れる」ために、1、2年生に自分の受験体験を話す機会があっても良いのかもしれない。

正解のない問題を与え自分なりの答えを出させる

塩瀬准教授は、自分なりの答えを見つけ出す力を付ける指導として、「この情報だけでは1つに定まらない」という選択項目を設ける工夫を提案した。選択肢の中に必ず正解があるとは限らない問題を解かせることで、生徒の正解を見つけるまでの選択肢との向き合い方や、結果重視の学習観を変えることが出来るのではないだろうか。比較的、教科や単元の特性にかかわらず取り入れやすい方法であり、教科指導と関連付いた指導の工夫としても参考になるだろう。

自分なりの答えを見つけ出す経験を積ませる実践としては、**京都市立大宅中学校**（P.12）の探究活動も興味深い。3年生の進路決定時までに、生徒が自分で進路を描ける力を身に付けさせるという目標の下、ポスターセッションや修学旅行などの教育活動を位置付けて、計画的にテーマを掘り下げる力や論理的思考力を育んでいる。従来から行ってきた教育活動に、キャリア教育の要素をうまく取り入れている実践例として、参考になるだろう。

客観性の高いデータを与え自身の取り組みを振り返らせる

鳥栖市立田代中学校（P.17）では、マナー検定や生徒目標アンケート、定期考査などの結果を生徒に伝え、生徒がそれを基に取り組みを振り返り、主体的な改善に結び付けるという流れで指導をしていた。

生徒が自ら改善に取り組むためには、まず生徒が自身の取り組みを正確に振り返る必要があるが、その材料が教師や生徒の主観に基づいた評価のみに偏っていては、十分な振り返りはできず、有効な改善点も見つけ出せない。そうした意味で、客観的なデータを教師の生徒理解に使うだけでなく、生徒が自分の取り組みを正確に評価し、進路を判断する材料とするために提供していくことも必要なのではないか。

自己肯定感や自尊感情を育み進路に向き合う心につなげる

福生市立福生第一中学校（P.22）は、まず進路に前向きに向き合う心を耕すために、保育園や高齢者福祉施設に体験先を限定し、職場体験を実施していた。

多くの学校では、職場体験を「勤労観を育む」取り組みとして位置付けているが、福生第一中学校では、勤労観を育む前提として、まず「自分は人の役に立てる」という自己肯定感や自尊感情を育てることを重視している。勤労観の育成は重要だが、福生第一中学校のように「勤労観を育む上で、まず生徒に何が必要か」という観点から職場体験の見直しが行われても良いのではないだろうか。

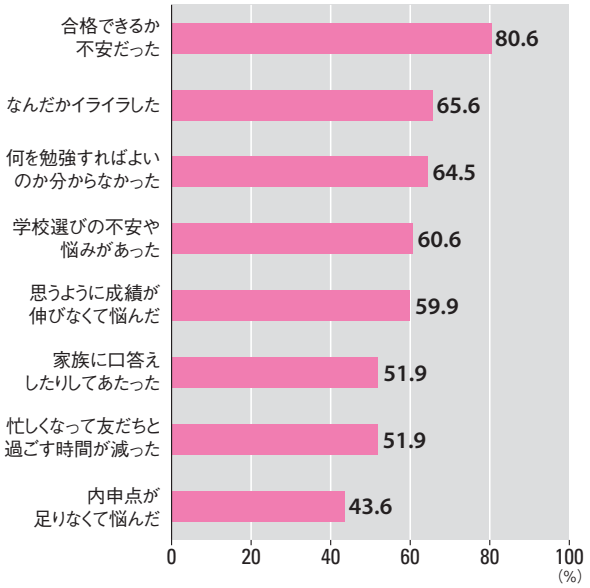
悩みと不安の高校受験

――振り返れば自分が成長するきっかけに――

2011年、ベネッセ教育研究開発センターが、高校1年生とその保護者を対象に行った高校受験の振り返り調査の結果から、受験期に悩んだこと、高校生になって感じた受験で得たことなどを見てみよう。

1 8割の生徒が合格への不安を感じ、6割の生徒が志望校選びで悩んだ

受験の悩み

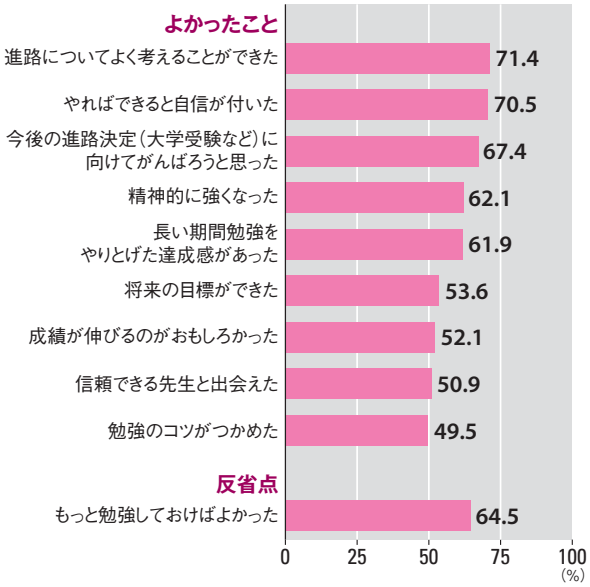


注1）「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%
注2）全14項目のうち回答率の高かった上位8項目を掲載
出典／Benesse教育研究開発センター「高校受験調査」（2011）

生徒の高校受験の悩みや不安を見ると、「合格できるか不安だった」と回答した生徒が8割と最も多く、次に、「何を勉強すればよいのか分からなかった」「学校選びの不安や悩みがあった」といった受験勉強の仕方や志望校の選び方についての悩みを回答した生徒が6割以上と続いた。

2 7割の生徒が受験の過程で進路についてよく考えやればできると自信が付いた

受験を振り返ってよかったこと・反省点



注1）「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%
注2）全15項目のうち回答率の高かった上位10項目を掲載
出典／Benesse教育研究開発センター「高校受験調査」（2011）

高校受験を振り返って、6～7割の生徒が進路をよく考え、今後の進路決定への意欲が高まるなど、進路に前向きな気持ちを感じている。更に、自信が付いたり、精神的に強くなったりと、自分の力に手応えを感じていることがうかがえる。一方、もっと勉強しておけばよかったという後悔も6割程度見られた。

3 母親から生徒への否定的関与が多いほど、生徒のイライラや反抗的態度が多くなる

■生徒の受験の悩みと保護者のかかわり

(%)

		全体	母親の否定的関与別			
			少ない	←	→	多い
生徒の悩み	なんだかイライラした	65.6	55.5	68.7	78.7	79.5
	家族に口答えしたりしてあたった	51.9	37.1	56.8	68.4	75.3
よかったこと	精神的に強くなった	62.1	64.1	62.1	61.4	56.0

注1）「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%
注2）母親の否定的関与については、「子どもに口出ししすぎてしまった」「自分の焦りや不安を子どもに伝えてしまった」「友だちやきょうだいと比較して、子どもに嫌な思いをさせてしまった」の3項目で「とてもそう」「まあそう」を選んだ個数によって、「少ない」～「多い」に分類した
出典／Benesse教育研究開発センター「高校受験調査」（2011）

母親から生徒への否定的関与と、生徒の悩み、受験後の振り返りの関係を調べたところ、否定的関与が多いほど、生徒のイライラや家族への反抗的な態度が多くなっていることが分かった。反対に、否定的関与が少ない方が、受験期を経て、精神的に強くなったという生徒が多い傾向が見られる。

つい「勉強しなさい」と口出ししたくなるものだが、焦らず、息抜きやスランプの支えとなりながら、親子共に互いから自立し、主体性を獲得していくための機会にできるとよいだろう。

4 6割の生徒が中3の初め頃までに高校受験を意識し、夏休み頃までに受験勉強を始める

■受験に関する時期

(%)

	高校受験を意識し始めた時期	高校受験に向けた勉強を始めた時期	今通っている高校が受験校の候補としてあがった時期	今通っている高校を受験することを決めた時期
入学前～中1の間	10.2	3.9	11.5	5.7
中2前半～夏休み後ぐらい	13.2	6.9	7.9	3.6
中2の後半	12.1	7.2	4.7	2.6
中3の初め頃	25.9 累計 61.4	21.0	15.4	11.3
中3の夏休み頃	16.3	25.0 累計 64.0	15.7	12.3
中3の夏休み後ぐらい	9.0	14.1	16.2 累計 71.4	16.1
中3の後半	7.1	12.3	18.1	30.3 累計 81.9
入試直前になって	1.6	3.9	7.1	15.7
とくに意識しなかった	4.4	5.7	3.5	2.4

注1）「入学前～中1の間」は、「中学校に入学する前」+「中1の初め頃」+「中1の夏休み頃」+「中1の夏休み後ぐらい」+「中1の後半」の%。「中2前半～夏休み後ぐらい」は「中2の初め頃」+「中2の夏休み頃」+「中2の夏休み後ぐらい」の%
出典／Benesse教育研究開発センター「高校受験調査」（2011）

「高校受験を意識し始めた」のは「中２の後半」までで３割強、「中３の初め頃」までで６割を超える。実際に受験に向けた勉強を始めるのは「中２の後半」までで２割、「中３の夏休み頃」までで６割に達するが、「中３の後半」から始めた生徒も１割強いる。

「今通っている高校が受験校の候補としてあがった時期」はばらつきが大きく、個人によってその時期に隔たりがあるようだ。

ミドルリーダーの挑戦
——前へ！前へ!!

円滑に学校運営を進めることを通じて より良い学校づくりを支えたい

栃木県佐野市立赤見中学校 **片岡博志** 48歳

Middle Leader

かたおか・ひろし◎教職歴25年目。佐野市立城東中学校などに勤務後、初任校である同校に再赴任して8年目。担当教科は数学。モットーは「是々非々を貫く」

これまで私が歩いてきた道のり

分からないことは率先して聞き未熟な部分を補う

教務主任となり、2012年度で2年目を迎えました。これまでに生徒指導主任を5年、学年主任を4年と経験を積んできましたが、教務主任の役割は想像以上に広いものでした。主な業務は、1～3年生それぞれの教育課程が1年間で全て終わるように時間割をつくり、学校行事の日程の計画を立て、次年度以降はそれを運用しつつ、行事などに向けて関係各所と連絡を取り、会議日程などの調整をすることです。それを3学年分行いますから、学校全体の運営にかかわることになります。前任者からは「先々を見通して早めに動くこと。そうしないと周りに迷惑が掛かる」と助言されました。例えば、学年主任への通知が1日遅れると、生徒が保護者にプリントを渡すのが遅れ、保護者からの返事も遅くなる。結果、教師側の準備も遅れるというわけです。

頭では分かっているのですが、1年目は教頭から「これはやったか」「あの通知は出したか」と言われてから取りかかることがよくありました。ある時、1～3年生の宿泊行事が立て続けにあったのですが、自分としては準備はまだ大丈夫と思い込んでいたために、校長の急な出張が入り、打ち合わせの日程調整が厳しい事態に陥ったことがありました。

そこで、予防策として、まず自分がこうしたらどうなるのかと考えたことを、周りの先生に出来るだけ相談するようにしました。そうすると先生たちの仕事のペースや課題が少しずつ見えてくるようになりました。

教務主任の見通すべき範囲は学校全体であり、自分の行動が影響する範囲も校内だけでなく、保護者や地域にまで広がります。自分はまだ見通す力が弱く、分からないことも多いのですが、立場が変わっても分かったふりはせず、また恥ずかしがらず、分からないことは自ら聞き、一つひとつの経験を糧にして、学校全体の取り組みの改善につなげていきたいと考えています。

自分から積極的に学年団の輪に入り人間関係をつくる

教務主任となり重視していることの1つは、普段から積極的に先生たちとコミュニケーションを取ることです。私は授業を受け持っている

ものの、分掌は学年団から離れており、職員室での席も校長、教頭の並びにあります。担任や学年主任だった頃は、特に意識しなくても休み時間や放課後に学年団の先生と生徒の話をしていたので、その時々の課題をしっかり把握できていました。しかし、今は自分から求めていかない限り、学年の課題を把握する機会はありません。そこで、自分から積極的に輪に入り、授業での生徒の様子などを話題にしながらコミュニケーションを取るようにしています。

こうした人間関係を築いておくことは、単に職場の雰囲気をよくするだけでなく、円滑な学校運営のためにも重要です。例えば、時間割の変更を突然お願いすることになっても、お互いをよく知っていれば、受け入れてもらいやすくなります。生徒のためにも、教師間の信頼関係は大切だと思います。

今は聞かれたことに答えるのが精一杯で、後輩の先生たちを積極的に育てるだけの余裕がありません。しかし、学校全体を見渡し、目配りが出来るようになれば、次のステップとして、学年主任や生徒指導主事に自分からアドバイスできるようになれるのではないかと思います。

教務主任は、担任のように生徒と接することはなく、校長のように学校の方向性を決めるわけでもありません。しかし、先生たちの教育活動を支える基盤となる運営を担っていると思います。

担任や学年主任時代と比べて、生徒とのかかわり方は大きく変わりましたが、今の責務をしっかり果たすことを通して、より良い学校づくりや生徒の学びの充実に貢献していきたいと思います。

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

突発的な事態にもスムーズに対応できる心の余裕を持てるように

私の役割は、学校運営において突発的な変更が起きても、先生方が教育活動をスムーズに進められるようにすることです。教師の戸惑いや迷いは生徒への接し方に影響し、生徒を困惑させるからです。

どんな場合でも教育活動を円滑に進めるためには、まず私自身が予想外の出来事があっても慌てることなく対応できるようにならなければなりません。今の自分に必要なのは心の余裕だと思います。

まずは、1年目に指摘されていたことを少しでも減らし、自分で先々をきちんと考えて行動できるようになることが目標です。自分の意識を変えようと、今年から変更点などはメモをしっかり取り、文書で残すようにしました。担任や学年主任時代にはメモを取らなくても、すべきことは頭に入っていたのですが、今は覚えきれないことも多く、次年度のためにも整理しておこうと思い、始めました。

片岡先生の取り組み　円滑な運営のために記録

◎変更や問題点、伝達事項など、全てメモをし、生徒指導、学校行事などのファイルにまとめるようにしています。曖昧なままにして、抜け漏れを防ぐためです。また、どの学校もそうだと思いますが、教育課程は時間割の変更があっても授業時数が合うように、パソコンでデータを管理しています。

パソコンで教育課程や行事の日程、発信した書類などを管理し、生徒指導や学校行事などで変更・課題が生じたことは、その場でメモをしてファイリングしています。

読者のページ
Reader's VIEW

2012 Vol.1 特集「『思考力・判断力・表現力』を評価し、育む」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト（http://benesse.jp/berd/）でご覧いただけます。

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」で、小谷野茂美先生の「生徒の全ては分からない。だからこそ心に寄り添いたい」という言葉が心に残りました。共感と共に、改めて丁寧に生徒の心と向き合う大切さを確認する機会になりました。［岐阜県／N中学校／H・R］

◎特集で秋田喜代美教授が言われていた「４つの力」と「指導と評価の一体化を実現させる３つの視点」が参考になりました。特に、３つの視点は、概念の理解だけでなく、具体的な方法を明示されていたので、分かりやすく、本校にも取り入れてみようという気持ちになりました。［宮城県／K中学校／S・Y］

◎朝倉市立十文字中学校の実施している「文中式ノート検定」が印象に残りました。多くの生徒にとって、ノートは教師の板書をそのまま写すだけのものになっているので、学んだ内容を自分の言葉でまとめ直す取り組みは、思考が整理され、定着度も高まると思います。また、「教科担任がどのように授業を構成し、指導しているのかは生徒のノートを見ればよく分かります」という言葉にも同感で、ノートを見ることは教師にとって自分の授業を振り返るよいきっかけとなると感じました。［島根県／K中学校／T・Y］

◎宮代町立前原中学校の取り組みを読み、頭の中がすっきりしました。理科において、電流の配線図を描かせるだけでは技能・表現の評価にしかならないが、電流の配線をつなぐ順番やその理由を書かせれば、思考過程に踏み込んだ評価となるというワークシートの工夫は、評価方法を理解する上で、具体的で分かりやすかったです。［兵庫県／C中学校／K・H］

◎長岡市立東中学校の「多くの生徒は、問題を形式的に捉えているだけで理屈が分かっていないため、言葉で説明できません」という課題意識に共感しました。また、「理解に至るまでの過程を自分の言葉で説明できる力を付けさせる」ために、学期に１回の口述試験を実施する取り組みもとても参考になりました。［滋賀県／N中学校／Y・H］

◎新連載の「ミドルリーダーの挑戦」で、横林慎也先生の研究主任を自分を高めるチャンスとして大役にチャレンジしようとする姿勢に、一生懸命やってみようという前向きな気持ちとエネルギーを感じました。そうした先生には生徒もついていくだろうし、周りの先生方も一緒にやろうという気持ちになるのではと思いました。［北海道／S中学校／N・M］

ご両親を亡くされたお子さま対象

ベネッセ 通信教育奨学制度のご案内

ベネッセコーポレーションでは、震災や事故などによりご両親を亡くされた日本全国のお子さまに、無償で教材をお届けする「ベネッセ 通信教育奨学制度」を2011年に新設いたしました。お子さまの高校卒業までの家庭学習を、〈ベネッセの通信教育サービス〉が全面的に支援してまいります。貴校や周囲にご両親を亡くされたお子さまがいらっしゃいましたら、本制度をお知らせいただけますと幸いです。

◎詳しいご案内は下記サイトをご確認ください
http://www.benesse.co.jp/mirai/shogaku/

◎お問い合わせは講座の電話窓口までお願いします
進研ゼミ中学講座　0120-929-100（通話料無料）
＊一部のIP電話からは042-679-8565へおかけください（通話料がかかります）
＊受付時間10:00～21:00（日曜・祝日・年末年始を除く）

未来を生きる 子どもたちのためにできること

教育情報誌『VIEW21』が発刊当初から
変わらず貫き続けている思いです。
日本の学校教育は先生方の「熱意」が支えている。
だからこそ、我々も全力で
先生方に役立つ情報を発信することにこだわりたい。
『VIEW21』は、これからも
全国の先生方と共に子どもたちの未来を見つめ、
今と未来を結ぶ教育を提案していきます。

Benesse® 教育研究開発センター『VIEW21』編集部

編集後記

グローバル化、低成長に加え、日本はかつて経験したことのない人口減少を迎えます。そうした時代を生きる生徒にどのような進路選択の力を身に付けさせるべきか。今回の特集で多くの先生にご意見をいただく中で見えてきたのは「選択した進路を前向きに捉え、進路を自分にとっての『正解』に近づけていくたくましさ」でした。『VIEW21』はこれからも先生方と共に半歩未来を見据えた特集を提案していきます。（佐藤）

VIEW21 中学版 2012 Vol.2　2012年8月9日発行／通巻第314号

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太、中丸満
撮影協力　荒川潤、川上一生、谷口哲、松原誠
イラスト協力　カモ、幸剛

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3391

©Benesse Corporation 2012